

雲ですが、なにか？

もこもこもつけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界の事情によつて雲に転生してしまつた少女。理不尽に贖うためかつてにクラスメイトとともに強くなれそして少女たちは選択を突きつけられる。その選択が真実を知るか、全てを失うか。それを知るのはただ一人のみ。

目次

転生と新たな世界	1
転生と勘違い	1
スキルと新たな出会い	5
蜘蛛ちゃんとの生活	11
逃亡	14
エルロー大迷宮異変調査隊 魔法使いの一幕	17
特訓と試練	21
危険地帯	25
死の恐怖と決断	28
レベルアップ祭り	33
フラグ	36
猿の復讐	39
命を賭けるということ	42
増援	45
第2ラウンド	48
戦いの終わり	53
Let's 進化!!?	56
新たなスキル	61
スキル『共有』	64
スキル検証と：	68
オリジナル設定	72
ステータスとオリジナル魔法	84
灼熱地獄	88
ここにちは中層！	92

野生のナマズが現れた！

偵察♪偵察♪

ナマズー

鰻なんか嫌いだ！！

鰻退治と蜘蛛ちゃんの進化

Merry Christmas!!?

Merry Christmas!!?

前編
後編

『忍耐』と悩み、そして縦穴

圧倒的強者と『気のせい』

真実のカケラ

今後の目標と最悪の目覚め

魔法の実験の時間だよ！

懐かしの上層

はやくねたい！

命の価値とは

守りたいもの

禁術

相手を『想う』ゆえに

たたかい

転生と新たな世界 転生と勘違い

なんの変哲もない日常。普通の生活を今日も送る。…はずだった。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

あの雲なんていうんだつけ：雲の上で寝たらふかふかで気持ちよさそうだな：

空を眺めながらそんなことを考える。

教室の黒板のところでは古文の先生”岡ちゃん”が大きな身振り手振りで授業をしている。聞いてる人なんてほとんどいないのに…まあ、私も聞いてないけど。

「じゃあこの問題を隠れてスマホを弄っている漆原ちゃんに答えてもらいましょう」

「えっ」と漆原さんが驚く。休み時間に弄ればいいのになんで今弄つてだんだろう。同じくスマホを弄っていた夏目が勝ち誇ったような顔をしている。

「夏目くんも他人事ではありませんよお」

「うぐっ」夏目がうめく。

ふふ ザまあ

結局、二人とも答えられなかつた。

「なら、空を眺めていた雲間ちゃんに答えてもらいましょうかあ」

当てられた。夏目は私も答えられないだろうと思つているのかニヤニヤしている。

「孔子の子孫の家から見つかつた竹簡をひとつ答えてください」
なるほど。それなら…

「礼記」

「正解ですう。雲間ちゃんは授業を聞いているようには見えないのでなんで答えられるんでしょうか…相変わらず不思議ですねえ」
「ちつ」

夏目が舌打ちをしている。

「負け犬の遠吠え」ボソッ

「んだとコラア！」

「事実じやん」

「はいはーい、二人とも喧嘩はやめましょうねえ。雲間ちやんは煽つちやダメですよお」

その時だった、天井に黒い大きな亀裂がうまれたのは、次の瞬間、物凄い激痛に襲われ、意識は闇の中に墮ちていった。

◆？◆？◆？◆？◆？◆？

んう…はつ。

ここは？何かやわらかいものに包まれているような感覚がある。
病院かな？あの後どうなったんだろう。

とりあえず起きよう。何が起こったのかも聞かなくちゃ。

バツ

フカフカしたやわらかいものから出ると目の前に広がっていたのは真っ青な空。空。空。時々雲。
は？

どこだよここ。

教室で大爆発が起きたと思つたら雲の上にいた件。
これはVRの仮想世界に違いない。きっとそうだ。
最近のゲームは凄いなあ：（高校生が言うようなセリフじゃない）
おつ。あそこから下が見れそうだ。雲の端まで行つてみよう。
モフツモフツ

ん？歩いた時に違和感を感じて足を見る。
……雲になつてる。

W h y!?

というか四足歩行してる。ちょっと意味がわからない。
ゲームっぽく「鑑定！」と心の中で唱えてみる。
シーン：

さすがに無理か。

『現在所持スキルポイントは150000です。スキル『鑑定LV.1』をスキルポイント100使用して取得可能です。取得しますか？』

うえい！、ビックリした。ひとまず、取得！

『スキル『鑑定LV.1』を取得しました。残りスキルポイントは149900です』

いやー、ファンタジーだなー。よし、早速自分を『鑑定』と念じてみる。

〈雲〉

ん？それだけ？

イヤイヤ、そんなわけない。

きっと失敗しちゃつたんだね…

〈雲〉

え？本当にこれだけ？

〈雲〉

は？何にもわかんないじやん！『鑑定』にかかつたポイントをどうしてくれるんだよ！

そういえばさつき残りのスキルポイントがどうとか言つてたな…：物は試しだ！こういう時は、課金？

えーっと『鑑定』に課金するよ！

『スキル『鑑定』をもう一度取得しますか？』

YES！

『スキル『鑑定LV.1』を取得しました。『鑑定LV.1』が熟練度に変換されました。残りスキルポイントは149800です』

もう一回！

『スキル『鑑定LV.1』を取得しました。『鑑定LV.1』が熟練度に変換されました。残りスキルポイントは149700です』

まだまだ！

『スキル『鑑定LV.1』を取得しました。『鑑定LV.1』が熟練度に変換されました。残りスキルポイントは149600です』

もういっちょ！

『スキル『鑑定LV. 1』を取得しました。『鑑定LV. 1』が熟練度に変換されました。残りスキルポイントは149500です』

『スキル『鑑定LV. 1』を取得しました。『鑑定LV. 1』が熟練度に変換されました。熟練度が一定に達しました。スキル『鑑定LV. 1』が『鑑定LV. 2』になりました。残りスキルポイントは149000です』

ふう。やつとLV. 2になつた：同じスキルを取得しまくつても

全然上がらない！？

地道に使つていいくしかないか…

さて、レベルアップした『鑑定』はどうかな？

スキルと新たな出会い

〈雲猫　名前　なし　〉

雲
間
空

おー！種族がわかつた。やつぱり雲なんだね。
LV・1の時の『鑑定』、使えなさ過ぎない？
まあ、少しづつLVを上げていこう。

今気づいたんだけど、私も周りの兄弟（？）も浮いてるんだよね
『飛翔』っていうスキルで飛べるみたい

でも、歩いてる感覚はあるという謎

あと、なんか持ってるスキルはなんとなくわかるんだよね

不思議♪

集中すると、出来ることが思い浮かぶ。

『蒼電魔法』

↑↓蒼電魔法LV・1　　雷弾

なるほど。これを使えるのかな？少ないな。LVが上がれば増えていくのかも。

『天候魔法』

↑↓天候魔法LV・1　　快晴

『雲魔法LV・1』

↑↓雲魔法LV・1　　雲作成

へえー、面白そう！

『MP自動回復』っていうのはその名の通りだね

MPは魔法を使うのに必要な魔力のこと。それくらいはゲームをあんまりしない私でも知ってるよ♪

早速使つてみたいたなあ

あつ、そうだ！『飛翔』のスキル持つてるんだから空飛べるんじやね？

地上はどうなつてるんだろう。
ワクワクが止まらないぜ！

雲から勢いよく飛び降りる。

イエーイ…え!??

ビュウウウウウウ

うわあああ、飛べない!!?なんでも!!?

あつ：『飛翔』のスキルまだLV・1じゃん！

他の兄弟（？）もただ浮かんでるだけだつたのに!!?
何考えてんだよ私!!?

◆?◆?◆?◆?◆?

ブヘツ

いつたあああ…ちゃんとスキルのLV上げてから飛び降りればよ
かつた：

誰だよこんなことしたのは!!? 痛いじゃないか!!?

シーン

知ってるよ自分だよ!!? 自業自得だよ!!?
はあ…はあ…こんなんだからいつもお母さんにドジって言われる
んだつた。

そういうえばなんで鑑定で表示される私の名前は名無雲間空しなんだろう
…まさか、教室での爆発で…死んだ?…

そんな筈ない。起きたらまたいつもの日常に戻れる。

でも、さつき空から落ちた時、凄く痛かつた。夢はゲームは痛みな
んか感じない。

それに、死ぬかもしないっていう命の危険を感じた。

咄嗟に『雲魔法』で雲を間に作つて勢いを落としたおかげで助かつ
た。

……本当に死んじやつたのかな…

まだ何も親孝行できていないのに…もうすぐ誕生日だから、出掛ける
予定を立てていて、お父さんもお母さんも楽しみにしてた。

ごめんなさい…ごめんなさい…親不孝な娘でごめんなさい。約束
破つてごめんなさい。死んじやつてごめんなさい。

いつまでもクヨクヨしても仕方ない。お父さんとお母さんに産

んで育ててもらつた命。一度死んでしまつたのなら、もう死ない。
死なないために強くなつてやる。

ここがどこかはわからないけれど、死なないようにならなきや

!

とりあえず情報を集めるために鑑定しまくる。

〈雲〉とか〈草〉とかどうでもいい情報が頭に流れ込んでくる。

う、頭痛い：ズキズキする。

うえ：醉つた：

『熟練度が一定に達しました。『鑑定LV. 2』が『鑑定LV. 3』になりました』

やつた！

酔つた甲斐があつたよ！

1つレベルが上がつただけだけど、めちゃくちや嬉しい。
早速自分を鑑定！

〈雲猫 LV. 1 名前 雲間 なし √

レベルが表示されたよ！

それにしてもこの雲猫つていう種族どんなのなんだろ？

〈雲猫：はるか上空に生息する雲の化身〉

へえー雲の化身かあー

雲の化身つて言うよりも雲そのものだよね
もつと鑑定しまくるぞー！

〈木〉〈雲〉〈草〉がたくさん流れ込んでくる。

うえー、めっちゃ気持ち悪い…

『熟練度が一定に達しました。『鑑定LV. 3』が『鑑定LV. 4』になりました』

う…

気持ち悪い

もうやりたくない…

早速自分を鑑定！

〈雲猫 LV. 1 名前 雲間 なし √

あれ？変化なし？

そんな…せつかく酔ったのに…

あれ、なんか色のついた棒線がある。

〈H Pバー〉

〈M Pバー〉

〈S Pバー〉

へえーすごい！

H Pとかが表示された！

さつき空から落ちたからH Pが結構減つてる…
やつぱり勢いで飛び降りるもんじやないな。

M Pバーが結構長い。

魔法3つもつてるし、魔法が得意な種族なんだろうなー

◆?◆?◆?◆?◆?

改めて今いる場所を確認する。なんか洞窟っぽい。ちょうど上に
空いてる穴から落ちて来たのかな…

鑑定！この洞窟なんていうの？

〈エルロー大迷宮〉

なんじやそりや

〈ダズトルディア大陸とカサナガラ大陸を繋ぐ世界最大の迷宮〉

へえー

大迷宮かー

人いるかなー？

なーんか嫌な予感

嫌な予感つてやたらと当たるんだよね…

あ、誰かいる。おーい おーい！

自分以外と会えたことが嬉しくて駆け寄る。

ゆっくりと振り向いたのは…えつ、蜘蛛!? え!?! 嘘でしょ!?!?

「シャアアアアアアアア！」

ひやわあああ！

全力で反対側の通路に逃げる。

逃げた先にも蜘蛛。蜘蛛。蜘蛛。

蜘蛛が大の苦手な私にとつてどこに行つても蜘蛛がいるなんて地

獄のようだつた。

右側の通路に投げ込むと、蜘蛛がいた。

でも、さつきまでウジヤウジヤいた蜘蛛とは何かが違う白い蜘蛛だつた。

その蜘蛛は襲いかかつてこなかつた。

『スキル』念話LV・1』をスキルポイント100使って取得しますか？』

いえーす！

『スキル』念話LV・1』を取得しました。

思い切つて、『念話』で話しかけてみる。

(ハ、ハロー)

返事がない。まるで屍のようだ…じやなくて、さっきまでは動いてたのに、固まつてる…

(こんにちわ、グッドモーニング、グーテンモルゲン)

(…)

あれ？人違ひならぬ蜘蛛違い？

(…フツカフカじやん！)

(えつ、あの…)

(このフカフカを…ブツブツ…)

動き出したと思ったら私の雲に夢中の…

(雲なら、いくらでも作つてあげるよ)

(！本当!? やつたー)

チヨロいな

(あなたも転生者?)

(そうだよー若葉姫色)

(若葉さんなんだ。私は雲間空。一人じや心細いから…一緒にいて欲しいんだけど…ダメ?)

(もちろんいいよ!)

(ありがとうございます！蜘蛛ちゃんつて呼ぶね)

(じゃあ、もこちゃんつて呼ぼうかな。雲ちゃんと被るしね)

転生して右も左もわからない世界で明るい友人ができました。

(蜘蛛ちゃんって結構喋るんだね。知らなかつた)

(前はなんて言おうか迷っている間にみんながいなくなつていつただ

け)

(つまり、コミュ障だと)

蜘蛛ちゃんととの生活

蜘蛛ちゃんと一緒に生活するようになつてから体感で2週間くらい経つたと思う。

光が届かない迷宮にいるから、体内時計が狂いまくってるのだ。
(ただいまー)

(お帰りモコちゃん。収穫あつた?)

(うん。大量にあるよ♪)

(さすがモコちゃん!)

現在私たちは役割分担をしている。

蜘蛛ちゃんは巣作りと巣にかかつた獲物の仕留め、私は『雲魔法LV・10・転移』で簡単に巣に戻つてこれるので、少し遠出して魔物を狩る。

そうすることで安全なホームでのんびりとご飯を食べれる状況を作り出しているのだ。
(いただきまーす)

うーん

やつぱり上層の魔物は毒入りばかりでんまり美味しくない…:
毒入りばかり食べてゐるせいで【悪食】という称号をゲットしてしまつた。

あと、洞窟の中は暗いから目を凝らして頑張つてたら『暗視LV.1』をゲットした。

スキル『暗視』、ゲットだぜ!

さらに、敵の気配がわかるようにならないかなーって思つてたら
『スキル『気配感知LV.1』を取得しますか?』

つて言われた。

迷うことなくとつたよ。

スキル『気配感知』、ゲットだぜ!

(素晴らしいかなマイホーム…)

(ダラダラしても勝手に食料が来てくれるし、食後の運動に出かければまた食料が増える。これはダメ人間になるやつ…あつ、今は雲

だつた)

快適なサバイバルライフを満喫している。けどやっぱり…

(不味い…)

(うん、せめて普通の肉がいい)

毒入りの肉は不味すぎるのだ。

今は慣れて食べられるようになつたけど、最初は不味すぎて吐き出すことが多かつた。でも食べないと死ぬから食べたけど。

調べてわかつたんだけど、私の種族〈雲猫〉は幻想種というものらしい。

長い生涯を雲の上で過ごすため、地上で発見されることはまず無い。

強い幻想種に生まれ変わったのにご飯を食べないで餓死なんてことは嫌だ。

人間の街に行きたい。そこなら美味しいものがある筈!

でも雲猫の姿だと街には入らない。どう見ても雲にしか見えないからね!

だから行くには人の姿になるしかない。そんなスキルあるかなあ

⋮

でも、どうにかして人の姿にならなければ…

私が間抜けなことをして空から落ちたという事実が知られてしまう!

それだけは絶対に嫌だ。人になる方法はとりあえずLVを上げてから考えればいい。

(蜘蛛ちゃん!頑張ろうね!いつか一緒に街に行つて美味しいものを食べまくろう!

(おうよ!もちろんだぜ!待つてろよ!馳走!)

そこで問題が一つ

LVの上がりが悪すぎる。私はまだLV・2なのに蜘蛛ちゃんはもうLV・20になつていた。スマートレットサーラテクトからスマートラテクトに進化してしている。蜘蛛ちゃんは「強ければ強いほどほどLVが上がりにくいのはゲームの鉄則だよ」って言つてたけ

どうつぱり不安…

(よし、お腹も膨れだし、食後の運動に行つてくるよ)

(モコちゃん、今日は私が行つてもいい?)

(いいよー。じゃあ留守番してるね)

いつもは蜘蛛ちゃんと暮らすようになつてずっと『念話』を繋ぎっぱなしに何かあつたら連絡するね。いつてらつしやい!)

蜘蛛ちゃんと暮らすようになつてずっと『念話』を繋ぎっぱなしにしてたから、すでに『念話』はカンストして『無限話』に進化した。『念話』は距離の制限があつて一定距離離れると繋がらなかつたんだけど、なんとの『無限話』は距離がどれだけ離れていても連絡を取れるのだ!!?

これでさらにホームの安全性が増した。

あと、いつのまにか『惰眠』を取得していた。効果は簡単に言えば、寝れば寝るほど一度に取得する経験値が増えるというもの。

めつちや良くない?すごいぴつたりだと思う。

でも、なんか名前が嫌だ。惰眠を貪つていたつて言われてるみたいでヤダ。

…まあ、事実だけど…便利だし使わせていただこう。

『惰眠』を取るまでダラけたなら、もつと惰眠を貪つてやるぜ!

◆?◆?◆?◆?◆?◆?

『気配察知』に反応がある。その反応はゆっくりと巣に近づいてくる。魔物とは気配が全然違うから、恐らく人間。まずは惰眠を貪るために頑張るとしますか!

逃亡

(蜘蛛ちゃん！敵襲！)

(えつ!!? 嘘!!? すぐに戻る!!?)

(待てる)

すぐに蜘蛛ちゃんに連絡する。蜘蛛ちゃんは速いからすぐに来てくれるだろう。

そうして いる間に侵入者は巣に炎を放つて きた。炎は糸を伝つて
広がり、周囲は火の海になる。

「＊＊＊＊＊＊＊＊＊…」

なにか言つてゐるけど関係ない。

う
…

仕返しだ。

一蒼電魔法LV1 雷彈

三

凄まじい電流が炎と大爆発を起こす
これで排除できたはず……

... * ! * * * !]

— * *

!!？まだ生きてる!?雷弾に加えて爆発まで起こしたのに…
つ!!？風の刃が爆風に紛れて飛んできて身体を切られる。
しまった：大きく爆発させたのが裏目に出てしまつた：

う。雲なら勝手に治りそうだが身体から切り離されると消滅してしま

身体の一部を失つてしまつた。

驚いて動きが止まつて隙にまた風の刃が飛んでくる。

『雲魔法LV.1 雲作成・盾』
密度が高い雲を作り出して盾にする。

マズイ。防戦一方だ。

雲で防いでも風の刃が当たつてＨＰがどんどん減っていく。
全力で距離を取り、魔法を使う。

『雲魔法LV. 1 雲作成』

大量に作り出し、時間を稼ぐ。

蜘蛛ちゃんと私の大切なホームを壊した人間は絶対に許さない!!

?

《熟練度が一定に達しました。スキル『怒LV. 1』を取得しました》
うるさい!!?」

『蒼電魔法LV. 1 雷弾』

ありつたけの雷弾を作り出す。放つた瞬間：
身体に糸が巻きつき、後ろに引っ張られた。

(蜘蛛ちゃん! おかえり! 早速だけど手伝つて!)

(…)

どうしたんだろう。

(蜘蛛ちゃん?)

(…逃げるよ、モコちゃん)

(何言つてるの? ホームはどうするの!?!?)

そう反論すると、普段の蜘蛛ちゃんからは考えられないほど強い思念で怒鳴られる。

(私だつて戦いたい! ホームを奪つた人間は許さない! でもあの人間たちは強い。勝てっこない! ホームはまた作り直せばいい。でも死んだら元に戻ることは出来ない! それはモコちゃんもよく知つてるでしょ!?!? 怒りに呑み込まれるんじゃない!!??)

…そうだ。ホームはまた作り直せる。勝てない相手に挑んでも無駄に命を散らすだけだ。

『雲魔法LV. 3 雲隠れ』

追加で雲を作り出す。

「* * *!?!?」

人間たちが私たちの姿を見失う。今のうちに逃げる。

(ごめん、私が間違つてた)

(分かればよろしいのだ。さ、行くよ!)
こうして私たちはホームを捨てて逃げた。

エルロー大迷宮異変調査隊 魔法使いの一幕

今回の調査内容は魔物の急激な減少についてだ。ここ2週間ほどで上層の魔物の数が驚くほど激減した。その原因を探る。

恐らく生存競争で生き残った魔物が進化を続けて強くなつたのだろう。

今回の調査では短い期間で魔物が激減したため、儂とブイリムスが一緒だ。

まったく…人族最強の魔法使いでもある儂にこんな誰にでも出来る簡単な調査をさせおつて…

なに？ここまで魔物の激減は前代未聞？下手したらA、Bランク相当の魔物が出現した可能性があるだと？

だから、儂に調査して欲しい？

ふふふ…そうか！それならば仕方ないのう！

人族最強の魔法使いである儂が一瞬で解決してやるわ！
さあ、行くぞ！

◆？◆？◆？◆？◆？◆？

「エルロー大迷宮 上層」

ふむ。確かに魔物が全然居ないな。今の時期はクイーンタラテクトが下層から上がってきて卵を大量に産むはずだが：

1時間に1匹襲われる程度じやな。

これは流石に少なすぎる。

調査に来てよかつたかもしがれん。

「ロナント様、どうしますか？」

「必ず何が原因があるはずじゃ。探索するぞ」

広い上層のどこに原因がいるかは全くわからない。
食料は一応1ヶ月分ある。多めに持ってきてよかつた。
食料が足りる限り探索を続けるとしよう。

今日で14日目。

明日には引き返さないと食料が持たない。

皆も長い間、日の光が当たらない迷宮にいることで気が滅入つてしま

ている。

だが、魔物が減った原因が全く見つからん。

強い魔物が出現したのだろうと予想しているが、位置さえ分からないとは…

「うわあ！」

「どうした？」

「身体が…動きません！」

光を当てるときラリと光るものが見える。

ふむ。極細の糸が張り巡らされているようじやな。

「光を当ててよく見てみい。糸に引っかかつておる。恐らくタラテクトの巣じや。恐らく今回の異変はこの巣の主が現れたことで起こつたことだろう。ちょっと待て。すぐに燃やしてやろう。」

魔法で火をつけると糸は予想以上に弱く、すぐに全体に燃え広がつた。

「あちゃやあ…やり過ぎてしもうた」

「ロナント様…今はいないうですが巣の主帰つてきたら怒り狂いますよ」

その時だった。あの方々の片割れが現れたのは。

「ロナント様、あれはなんでしょう？」

ブイリムスにそう言われて巣の奥に目をこらす。

…雲？雲の魔物なんて聞いたことがないが…

突然現れた雲のような魔物に驚いていると雷の弾が大量に飛んできた。

さつき放つた炎に引火し、大きな爆発が起きる。

すぐに風のシールドを張り、防御する。

だが、シールド越しにも凄まじい衝撃が伝わってきた。

「…大丈夫か!?」

「はい…なんとか…」

凄まじい威力の魔法じや…

あんな威力のものをポンポンと撃たれてはたまらん。爆風が晴れる前に風の刃を飛ばして牽制する。

爆風が晴れると謎の魔物は身体を構成する雲の量が減ったように見えた。

魔法が当たつたようじやな。

雲であるがゆえに風とは相性が悪いようじやの。このまま攻めるぞ

先程よりも強い魔法を放つた時、突如現れた雲に防がれた。

雲を作り出せるのか：

分厚い雲を突破できるように一点に集中して魔法を当てる。

雲が晴れた。突破できたようじやな。

その魔物は青く輝く瞳を怒りで染めると睨みつけた。

その視線に思わず怯んでいる隙に魔物は素早い動きで距離をとり、また雲を作り出した。

その雲から出てきた魔物は雲の量が元に戻っていた。

自身を治療することもできるのか：

その厄介さに唸つていると巣のさらに奥から白い蜘蛛が現れた。

協力しているようだ。

(*****!*****!)

(*****!*****!...)

なにかを念話で話しているようじやが、知らない言語で話しており、内容がわからぬ。

魔物達が会話になつていて隙にスキル『鑑定』を発動させる。チャンスは今しかない。未知の魔物のことだけでも鑑定しなければ：

（雲猫 L.V. 1 名無し

ステータス

H P 300 / 300

M P 350 / 350

S P 20

0 / 200

平均攻撃能力：200

平均防御能力：350

平均魔法能力：650

平均抵抗能力：200

平均速度能力：500

スキル

「雲猫」「蒼電魔法LV. 1」

「天候魔法LV. 1」「雲魔法LV. 3」

「MP自動回復LV. 1」

「気配感知LV. 1」「暗視LV. 3」

「飛翔LV. 10」「念話LV. 10」「無限話LV. 2」「怒LV. 1」

「剛：《鑑定が妨害されました》」

なんじやと!? 鑑定を妨害？ そんなことができるのか!?

それに雲猫だと？ 聞いたことがない種族じゃ。新種かもしだん。
そのうえまだLV. 1だというのにステータスがかなり高い。

成長したら危険じゃ。

魔物たちは話し終えたようで、話すのをやめ、こちらを向いた。

これから先ほどよりも激しい戦いが始まるだろう：

なつ!? 消えただと!?

雲が現れたかと思うと2体の魔物は跡形もなく消えていた。
まるで夢のようじやつた。

「ロナント様！ 魔物は!?!?」

「なんらかの魔法を使つて逃げたのだろう」

とりあえず負傷者が出てよかつた。

このことを報告するために帰るとするか。

特訓と試練

人間と戦つて負けて逃げてきた。

原因は2つある。

慢心と経験不足だ。

私は生まれた時からステータスが高かつた。だから心の何処かで慢心していたのだ。

上には上がいると思い知らされた。

スキルのレベルを上げただけで強くなつたと思い込んでいた。

本当はただ使える技が増えただけ。努力をしないと強くなれない。

当たり前のことなのに、調子に乗つて忘れていた。

悔しい。自分は持つていたのに努力を怠つて負けた。

悔しい。もつと強くなりたい。二度と奪われたくない。

蜘蛛ちゃんにトントンと肩を軽く叩かれる。

すぐに念話を繋げた。

(どうしたの?)

(今後のことなんだけど、ホームを作らないでいようと思う)

(いいと思う。今回のことでの自分が凄く緩んでいるのに気づけた。

ホームがあつたらまた慢心しちやう。もつと強くなりたい)

(私も。モコちゃんが強いから、モコちゃんに甘えてた。モコちゃん

がいればなんとかなるつて思つてた。私も強くなりたい)

(そつか：お互い様だね)

(うん。頑張ろう!)

(おー!)

◆?♦?♦?♦?♦?♦?

あの人間達がしたことは許せないけど、少し感謝もしている。

努力するきっかけをくれた。なにもきっかけがなければわたし達はずつとあのままだつただろう。

名も知らぬ人間たちにほんの少しだけ感謝をしながら目の前の敵に電撃をぶちかます。

激しい雷を纏つて突進する。MPが切れない限り魔法を使つてレベルを上げている。一回MPが切れて、気絶した。

魔法はひたすら使えばいい。

『雲魔法』と『蒼電魔法』はLV.4になつた。

『天候魔法』は一応使つてみたけど迷宮内にいるから効果が出てるかわからない。

いつか迷宮の外に出たらレベルを上げてみよう。保留！

MPを消費しまくつてると『MP自動回復』はカンストして『MP超回復』になつた。

やつたね！

でもステータス関連の鍛え方が分からなくて、とりあえずひたすら走つてみるとした。

そうしたら『瞬発LV.1』と『持久LV.1』を取得した。

ステータスを高めてくれる効果があるらしいので同じような効果を持つっていた『剛力』と『堅牢』を鍛えるために重い岩を持ち上げたりしている。

無駄に広い上層を駆け回るのが日課になつた。

…なんか駆け回つてると子供に戻つた気分になる。

蜘蛛ちゃんはスキル『韋馱天』を元々持つてゐるみたいですがく速い。

ちなみに『鑑定』もレベル上げしてゐるよ。

走つてる時に常時発動にしてる。

おかげで毎日グロツキーですよ…

でも、『鑑定』はLV.6になつた。

種族とレベルと名前と強さが表示なれるようになった。

〈やや強め〉つて出でてきた。

蜘蛛ちゃんを鑑定してみたら〈弱い〉つて出でてきた。

辛辣だな…

頑張れ、蜘蛛ちゃん！

今日も今日とて蜘蛛ちゃんと全力の持久走。

SPが切れるときHPが減り始めるので休憩。
それを繰り返す。

『熟練度が一定に達しました。スキル『瞬発LV.4』が『瞬発LV.5』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『持久LV.4』が『持久LV.5』になりました』

お！上がった！

やつた！やつぱり走ると強くなれるんだね！

（蜘蛛ちゃん、そろそろ終わりにしよう）

（そうだねー。）

『無限話』で喋っていると突然地面が消えた。

（え？）

（うわああああああああ！？）

落ちてる！？

穴があつたのか！？

走り込みのためにOFにしていた『飛翔』をすぐさまONにする。
空から飛び降りた時のような醜態は晒さないよ！

私は日々学んでいるのだ！

あれ？蜘蛛ちゃんがいない…

（モコちゃん！助けて！）

すぐに下に向かっていく。

見つけた！

蜘蛛ちゃんは糸で壁にぶら下がつていて無事だつた。
でも、空中を喧しく飛び回る蜂に囲まれていた。

『雲魔法LV.4 雲分身』

『蒼電魔法LV.4 雷の牙』

蜘蛛ちゃんを囮む蜂と同じ数に分身して電撃を食らわせる。
分身は役目を終えると消滅した。

『雲魔法LV.1 雲作成』

雲の上に蜘蛛ちゃんを乗せる。

（大丈夫？）

(うん。ありがとう。助かったよ…)

話している僅かな時間で新たな蜂がやつてくる。

(蜘蛛ちゃん！いくよ！)

(了解！)

蜘蛛ちゃんは糸で捕らえて毒牙。

私は『蒼電魔法LV.1 雷弾』を発射して蜂を倒す。

無事に地面に到着できた。

でも、穴の上には戻れそうにない。

大きな蜂の巣から大量の蜂が飛び出してきていて、戻るにはそこを突破する必要がある。

さすがに数が多くすぎる。

(どうしようか、蜘蛛ちゃん。)

(うーん…)

その時、不意に嫌な予感がした。

危険地帯

死の恐怖と決断

岩陰に隠れてからそつと外を覗く。

そこにはさつき蜘蛛ちゃんが糸で捕まえたけど、トドメを刺し損なった蜂が拘束から逃れようともがいていた。

そして、そこにゆつくりと近づく蛇の姿。

〈エルローバラード LV5 ステータスの鑑定に失敗しました〉

上層にもいたけど、かなり強くて狩るのにはかなり苦労した。

ここにはこんなのがポンポン出てくるのか!?

今はさつき魔法を使いまくったせいでMPが少ない。

こつちに気付くな:

蛇はゆっくりと蜂に近づいていく。

けれど、蛇が蜂に何かすることはなかつた。
正確にはできなかつた。

凄まじい速度で何かが蛇の体を引き裂いた。

(は?)

突然の出来事に固まる。

あの蛇が、まるで紙切れのように、簡単に細切れにされた。

頑健な鱗に守られた、あの蛇が。

私と同等の素早さを持つ蛇が、反応さえ許されずに。

〈地龍アラバ LV. 31 ステータスの鑑定に失敗しました〉

それは、悠然とそこにいた。

龍という名前とは裏腹に、そのフォルムは狼なんかに近い。
大地を踏みしめる四肢。

長く伸びた尾。

翼はない。

そこには、威風堂々たる龍の姿があつた。
やばい。

魔物としての本能、人としての理性、魂からの叫び、そのどれもが声を揃える。

あれはダメだ。

絶対に勝ち目がない。

そもそも、勝敗とかそんな次元で相手ができない。

あれから見たら私たちは、ただの餌にしか見えない。

獲物ですらない。

視界に入った時点で喰われるのが確定する。

それだけの隔絶した存在だ。

地龍アラバは、バラバラになつた蛇を一つずつ咀嚼していく。

私たちには必死で息を潜める。

『熟練度が一定に達しました。スキル『隠密LV1』を取得しました』

うるさい！

お願ひだから黙つてて！

あれに気づかれたらどうするんだ！

地龍アラバは、蛇を咀嚼し終えると、蜂には目もくれずに立ち去つていった。

た、助かった。

最後までこつちに気付かなかつたのか、それとも気づいて見逃されたのか、どつちかわからぬけど、とにかく助かつた。

死にそうな目には何度もあつてきただけど、あそこまでヤバいのは初めてだ。

思い出出すだけでも怖い。

ダメだ。

あんなのが徘徊してこのエリアは、何としても早急に脱出しないといけない。そうでないと死んでしまう。

(蜘蛛ちゃん…)

(…)

私でも死の恐怖を感じた。私よりもステータスが低い蜘蛛ちゃんは私が感じた恐怖の比にならないくらいの恐怖を感じただろう。(モコちゃん、アレは無理。絶対に勝てない。この縦穴を登るしかな

い。)

(うん。私も同意見。でも、アイツはこのエリアを徘徊してる。またここにくる。それまでにあの蜂たちを突破して上に上がる? 縦穴を登るには安全な巣を作りながら登るのが一番。でも、その途中にアイツが来たら? 前来た時にはなかつた巣があれば壊そととするはず。そうしたら、今度こそ目をつけられて死んでしまう!!?)

(じゃあ、あんな化け物がいるエリアを探索するつて言うの!!?)

そんなのは自殺行為になるのはわかってる。

でも…

(アイツはここにまた来る。それから逃れるには探索して他の道を見つけるしかない)

レベルアップ祭り

あの化け物と別の道を進むことを決めた私たち。

デツカい蛇のような強敵がポンポン出てくることを覚悟していたが：

普通に上層にいるカエルとかタラテクト種とか、いた。
弱い魔物が生きてるんなら普通にアイツに会わなければ生きていけんじやね？

とか思つてた矢先に現れたのは魚に足が生えた気持ち悪いやつ。
アレは生理的に無理。

あの魚とエンカウントしたら氣絶してしまう。
氣絶している間に御陀仏よ。

そんなわけで蜘蛛ちゃんと一緒にコソコソ移動する。
その間にも鑑定、鑑定。

コソコソ

⋮⋮⋮

さつきから気になつてたけど壁に張り付いてるタニシみたいなやつはなんで食べられないんだろう？すごい弱そうなのに…
もしかしたら見た目が弱そなだけですごい強いのかも！
鑑定！

「エルローゲーレイシュー L.V. 3 ステータスの鑑定に失敗しました」

うーんよく分からん。

(蜘蛛ちゃん、あのタニシ食べてみない？ちょうどお腹空いてきたし)
(うん。いいよ。なんでいっぱいいるのにみんな食べないんだろう？)

(さあ？わかんない)

蜘蛛ちゃんは毒牙、私は雷纏いの雷でタニシを殺す。
(いつただきまーす)

何が起きた!? 確かタニシを食べたんだ。
この世のものとは思えないほど不味かつた：
もう絶対に食べない。

蜘蛛ちゃんは「お残しは私の主義に反する!」といつて全部食べて
た。

すご：

弱くても何か取り柄があれば生きていけるんだね。
：つまり、死にかけてた私たちは取り柄がない…!?
いやいや、転生者という取り柄があるさ。
考えない、考えない。

◆？◆？◆？◆？◆？◆？

現在、下層を探索してから広いところに出たのでスキルの練習をして
いる。

よりスマーズに速く魔法を使うために魔力を意識して使う。
魔法は魔力を使つてイメージを現実世界に反映させる。

『蒼電魔法LV. 4 雷の牙』

雷でできた大きな牙を想像しながら発動させ、岩に噛み付く。
バーン

なんのイメージをしないでテキトーに使つた時よりも威力が上
がつてる!

よし、この調子で頑張るぞ!

『熟練度が一定に達しました。スキル『蒼電魔法LV. 4』が『蒼電魔
法LV. 5』になりました』

周りの岩に向かつて片つ端から『雷の牙』で噛みついてたらレベル
が上つたー!
やつたね!

とりあえず1つレベルが上がったから次だよ！

全部均等に鍛えて行かなきやね！

次にレベル上げするのは『雲魔法』。

高いレベルのものを使った方がレベルが上がりやすいから、分身していくよ

『^分雲魔法 ^身L V. 4 ^術雲分身』

忍忍！忍者になつた氣分！

それにも自分がたくさんいるのって不思議。

この中でかくれんぼしたら絶対に見つからない自信がある。

今度蜘蛛ちゃんとやつてみようかな…：

『熟練度が一定に達しました。スキル『雲魔法 L V. 4』が『雲魔法 L

V. 5』になりました』

あ！上がった！

L V. 5は何ができるんだろう？

ふむふむ…忍者度が増したよ！

最後にレベル上げするのは『鑑定』。

走り込みはやらないよ。

下層走り回つて強い魔物に遭遇とかしたら死んじやうもん。

でも、『鑑定』やると頭割れそうになるんだよな…：

限界になるまで見えるものを全て鑑定していく。

「エルローゲーレイシュー」×「エルローゲーレイシュー」×「エルローゲーレイシュー」
「レイシュー」×「エルロード迷宮の壁」×「エルローゲーレイシュー」：
⋮タニシ多いな!!?

う、そろそろ酔つてきた…

『熟練度が一定に達しました。スキル『鑑定 L V. 6』が『鑑定 L V.
7』になりました』

ヒヤツホーイ！あがつたー！

（蜘蛛ちゃん、『鑑定』が L V. 7 になつたよ！）

（やつたね！）

思わず蜘蛛ちゃんと喜びを分かち合う。

ハーハー

なんか笑つてたら止まらなくなつて過呼吸になることつてあるよね。

今、そんな感じ。

ふう、落ち着いた。

(蜘蛛ちゃん！勝負しない？糸か雲の中に捕まえた方が勝ちで)

(いいよー！でも、私は毒を当てなきやいいけどモコちゃんはどうするの？)

(雲魔法だけでやるよ！)

(オッケー！)

(レディー…ゴー!!?)

開始早々糸が飛んでくる。

こんなに早く捕まつてあげないよ！

『雲魔法LV. 1 雲作成』

雲を細長い紐状にして作り出す。

さらに…

『雲魔法LV. 2 雲操作』

生み出した雲を操つて蜘蛛ちゃんを追い詰める。

蜘蛛ちゃんは持ち前のスピードで雲の紐を振り切ると網状の糸を発射してきた。

蜘蛛ちゃん、やつぱり速い！

(捕まえた！あれ？)

糸に捕らえられた瞬間、私は跡形もなく消えた。…ように見えてい

るだろう…

フフフ…蜘蛛ちゃん！君が見ていたのは幻だ！

『雲魔法LV. 5 幻雲』

さつきレベル上げで取得したばかりの魔法だ。

蜘蛛ちゃんの後ろから忍び寄り、雲で捕まる。

ボフツ

(ふふ、私の勝ち♪)

(うわあああ…まーけーたー)

私は喜びのダンスを踊り、蜘蛛ちゃんは悔しさのあまりゴロゴロと転がる。

(あんな凄い魔法いつ覚えてたの!?!?)

(さつき)

(いいなあー・私も「騙されたな! それは幻だ!」ってやりたい!)

やりたいのそれなんだ::

フラグ

喜びの舞 o r 悔しさのゴロゴロをしている途中に現れたのは1匹の魔物だつた。

〈アノグラツチ LV. 8 ステータスの鑑定に失敗しました〉

初めて見る魔物だつた。

2メートルくらいのでかい猿っぽい。

：でも、顔がポケくつとしててなんかかわいいな。
けど：

その猿は唐突に襲い掛かつてきた。

ブオーンッ

怖!!?

速!!?

なんか!!? ヤバい音が!!? してるんですけど!!?

あんなのに当たつたら身体が弾け飛ぶわ!!?

『蒼電魔法 LV. 5 雷刃』スツ

ですよねー!!? あんなヤバい音のパンチ繰り出してくる奴に当たるわけないよね!!? 分かってるよ!!? そんなこと!!?

蜘蛛ちゃんも糸で捕まえようとしているが、全く当たつていな。ていうかあの猿、もう猿やめてるだろ!!?

『熟練度が一定に達しました。スキル『集中LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『蒼電魔法LV. 5』が『蒼電魔法LV. 6』になりました』

ありがとうございます!!?

ナイスタイミング!!?

(蜘蛛ちゃん！電撃ぶちかます！離れて！)

(オッケー！)

蜘蛛ちゃんがきちんと離れたのを確認してから新たな魔法を使う。

『蒼電魔法LV. 6 放電』

「ホオアアアアアアア!!?」

猿は電撃でかなりの体力が削れ、おまけに麻痺しているみたいだ。

(蜘蛛ちゃん！やつたれ！)

すかさず蜘蛛ちゃんが飛び出し、動けない猿に向かつて毒牙を突き

刺し トドメを刺す

卷之三

うわあああ
!?

なんたよ急に!!!

死ぬ間際まで叫んで悔からせるとかなんかな?」

やめて
？

経験値が一定に達しました。固体、雲猫LV.
15がLV.
16に

なりました

《各種基礎能力値が上昇しました》

『スキル熟練度レベルアップボーナスを取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『集中LV.1』が『集中LV.

『2』になり扱した》

『熟練度が一定に達しました』
→ ノーリスク LV

『熟練度が一定に達しません。スキル『MP超回復LW.』が『MP

超回復LV.2になりました

(なんだつたんだ?)

(わからぬ…でも、怖かつた…)

(うん)

も、何も起こらないに、

八九
一
二
三

雲猫 L V. 16

ステータス

H
P

4
0
0
/
4
0
0

M
P

5
0
0
/
5
0
0

S P
35

0 / 350

平均攻擊能力：340

平均防御能力：280

平均魔法能力 : 750

平均扭抗能力：460

立坡道居簡文

卷一百一十五

〔天侯魔法〕W. 1 — 〔雲魔法〕W. 5

〔M P 超回復L.W. 2 ━ H P 自動回復L.

「氣配感知LV.
2 「暗視LV.
3

「飛翔LV. 9」「念話LV. 10」「無限話LV. 2」「集中LV. 2」

「怒」LV. 1

—剛力LV.
4_ —堅牢LV.
2_ —瞬発LV.
5_ —持久LV.
5_

—— 憶眼 ——

下
三

「悪食」 「魔物殺し」 「魔物の殺戮者」 「惰眠の支配者」

…すつつつつつつ（？）

ニヤツホーリ ?

やつたね！

いえーい！

•

八一八
一

喜ひすきて疲れた……

それでも強さが数値化されるのっていいね！

猿の復讐

(…)

(…)

遊牧民みたいな生活に変わつてから、あんまり眠れなくて今、眠気がピークになつてる。

蜘蛛ちゃんも眠いみたいで無言になつてる。
『熟練度が一定に達しました。スキル『睡眠耐性LV. 1』を取得しました』

おお…ついに耐性まで取れた…

(蜘蛛ちゃん、そろそろ寝ない?)

(!!寝る! おやすみ!)

一気に元気になつて私の身体に飛びついてきた。

慌てて蜘蛛ちゃんが届かない高さまで飛び上がる。

(ダメだよ! 私も寝るんだから! …それにこのまま寝たら雲なんて目立つし、狙われまくりだよ?)

(それはダメだ。モコちゃん、巣を作ろう!)

そう言つて巣を作つて安眠するぞ計画(作戦名がそのまま….)を話し始めた。

壁の高いところに糸で巣を作つて、中に雲を詰める。周りは薄くスライスした岩を貼り付ける。完成!!?

…と いうことらしい。

蜘蛛ちゃんは早速壁に登つて巣を作り始めた。

寝るつて決めてからの行動が速い:

さてと、私は岩をスライス♪スライス♪

『蒼電魔法LV. 5 雷刃』

案外簡単♪

次は↙これを↙上まで↙…

蜘蛛ちゃん!!? 巣の場所高すぎると!!?

これから安眠するための寝床作りをしてるのに何故に重労働しなきやならんのだ!!?

(モコちゃん！いいよー！)

(蜘蛛ちゃん！巣の場所高すぎんだろ!!?)

(だつて魔物に見つかりにくい方がいいじゃん?)

うつ、それはそうだけど…

ダアー!!? わかったよ！持つてつてやんよ!!?

これが俗に言う深夜テンション…初体験！

『雲魔法LV. 1 雲作成』

おつきい雲の器を作り出し、その中にスライスした岩を入れていく。

魔法で持ち上げてるなら軽そうだけど実際は私の力で持ち上げてるから、重い。

寝ようとしただけなのに!!? ホームがない状態で眠ろうとするのがこんなに大変だなんて…

巣の高さまで浮かび、周りにペタペタと薄岩を貼り付けていく。
ふう…やつと終わつた…

(モコちゃん！ありがとう)

(どういたしまして)

さつきまで岩を入れていた雲を巣の中に詰めていく。

(よっしゃ、完成!)

(わーー！ぱちぱち)

今度こそ、おやすみなさい…zzz…

◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

コンツ

何かが当たる音に目が覚める。

なんだろう？

恐る恐る巣から顔を出してみると

〈アノグラツチ LV. 5 ステータスの鑑定に失敗しました〉
〈アノグラツチ LV. 3 ステータスの鑑定に失敗しました〉
〈アノグラツチ LV. 6 ステータスの鑑定に失敗しました〉

〈アノグラツチ L.V. 4 ステータスの鑑定に失敗しました〉
〈アノグラツチ L.V. 1 ステータスの鑑定に失敗しました〉
〈アノグラツチ L.V. 6 ステータスの鑑定に失敗しました〉
〈アノグラツチ L.V. 5 ステータスの鑑定に失敗しました〉
〈アノグ……〉
↑……

ぐおつ：

常時発動させてる鑑定からえげつない量の情報が流れ込んでくる。
でも、つまりそれだけ数がいるってこと

ヤベエ…ヤバい

(蜘蛛ちゃん！起きて！猿が！)

(んう～？猿う～？)

そう言つて起きた蜘蛛ちゃんも下を覗く。

(うわあああああ!!?頭が!!?)

蜘蛛ちゃんも常時発動にしてるのか…大丈夫かな?
つてちがーう！

(蜘蛛ちゃん！猿が攻めてきた！)

(多すぎるでしょ!!?限度つてものがあるでしょ!!?限度つてもののが
!!?…やるしかない。やらなきや死ぬ!)

(ラジャー)

蜘蛛ちゃんは巣の上から、私は飛び回つて猿を倒す。
さあ、命を賭けて戦おうじやないか、猿。

命を賭けるということ

(ていうか、なんでアイツら私たちがいるのわかつたの!!? せつかく岩でカモフラージュしたのに!!?)

(知らないよ! 寝る前に倒したアイツらの仲間を1匹倒したからそれに気づいたのかも…あと、カモフラージュしたのは私!!?)

(あんないっぱいいるのに1匹居なくなつただけで気づくの!!?)

(私は聞かないでよ!!? そんなの知らないもん!!?) あと、カモフラージュで頑張ったのは私だつてば!!?)

そんなことを言い合っている間に猿は壁を登つてきた。

(蜘蛛ちゃん! 私は空からやる!)

そういうて簡易ホームから飛び出すと猿が登つてきた辺りまで下降して魔法を使う。

『蒼電魔法 L V . 6 放電』

電撃をモロに受けた猿たちは麻痺して動きが鈍くなる。

今までの敵なら、これだけで倒せたはずなのに…

(オラアー! くらええ!)

蜘蛛ちゃんは糸をひたすら猿の進行方向にまいて行動を制限する。あつ、毒撒き始めた

あの毒すごいんだよな…

どんな奴もあれを喰らえばノックアウト。

絶対に喰らいたくない攻撃第1位筆頭だよ

猿たちは仲間が殺されたり、行動不能にされたりしているのに全く気にせず私たちを倒すという目的だけを貫いている。

何がそこまでさせるのか…

それにそもそも攻めてきた理由がわからない。

最初に仲間を1匹殺したから攻めてきたというならば、糸で捉えられてる仲間を助けるはずなのに…

『雲魔法 L V . 4 雲分身』

分身の術!!?

『『蒼電魔法 L V . 6 放電』』

いっぱい撃てば効果も倍!!?

おりやあー!

『経験値が一定に達しました。個体、雲猫がLV. 16からLV. 1
7になりました』

うつそだろ!!? 今なんか!!? レベルアップ中はスキルが切れるか
ら飛べないんだよお!!?

下を見たら猿、猿、猿…

うわあああ

おちるううう…

ヒュン

蜘蛛ちゃんの糸だ!

少し落ち着いた。

スキル発動!

(蜘蛛ちゃん、ありがとう!)

(どういたしまして…うわあ!)

蜘蛛ちゃんの方を見ると、猿が簡易ホームにまで迫っていた。

ヒュンッ

あ、蜘蛛ちゃんが糸で縛つた。

簡易ホームの際に縛つたことで猿の侵入を防ごうとしているのだ
ろう。

さすが!

(うそ!!?)

(はつ!!?)

あの猿が飛び降りた。自ら。

後続の邪魔にならないように飛び降りたのだろう。

…頭が狂つてるとしか思えない。

なんなんだよ!!? この猿たち…

なんでこんなにも命を賭けてまで私たちを狙う?

何が目的?

何を1番に考えている?

なんで…

なんで…こんなにも命をあつさりと捨てられるんだよ!?!?

私たちは、生きたくて、生きていたくて、もう何も失いたくなくて、
こんなにも足搔いているというのに…

命は一度失つたら帰つてこないのに

怖い：

この猿たちを理解できない。理解したくもない。

でも、猿たちを倒さなければならない。

自覺した。

私は生まれながらにして他より強かつた。

だから、緩んでいた。

テキトウにやつても勝てると思つていた。

命を賭けていなかつた。

命を賭けるということを理解してなかつた。

ここが：

この世界が命を賭けなければ生きていけない世界だと認めたくな

かつたんだ。

まだ日本において、これがただの夢であることを期待してた。

だけど、認める。

認めざるを得ない。

死の恐怖がある。

私たちは死にたくない。

だから、死んでくれ、猿。

増援

(モコちゃん！壁から離れて！)

声に従い、壁から離れると蜘蛛ちゃんが脚を簡易ホームから出した。

猿にその脚を掴まれた。

千切れそうなほどの力で掴まれ、顔を顰めている。
けど、諦めてない。

狙いは…？

蜘蛛ちゃんが自分が出した糸に触れる。

『操糸!!』

今まで放された糸がくつついていた猿を飲み込んだ。
糸にくつついていた大量の猿たちはモロにスキルの影響を受け、行動不能に。

(やつたーー！)

(凄いよ、蜘蛛ちゃん！)

(モコちゃんこそ！)

でも…

そんなふうに壁を乗り越えるとすぐに新たな壁が現れるものである。

(モコちゃん、まだまだ来るよ！)

(わかってるよ！でも、いける！)

猿たちは一体どこから来たのかって思うくらい倒しても倒しても
どんどん増援がくる。

ホント、どんだけ来んのよ…。

勘弁してよ。

そして、その増援の中に、いてはいけないものがいた。

〈バグラグラツチ LV. 3 ステータスの鑑定に失敗しました〉
〈バグラグラツチ LV. 4 ステータスの鑑定に失敗しました〉
〈バグラグラツチ LV. 6 ステータスの鑑定に失敗しました〉

バグラグラツチ…?

バグラグラツチ…アノグラツチと似てる!!?

進化系か!!?

巨大な口。

その口の中にはギザギザの凶悪な牙が生えている。

猿の倍くらいの体長。

巨猿が現れた。

猿だけでもこんなにも苦戦した。

その進化系なんて…

猿の増援としてやつてはいけないものが来てしまった。
協力されたら太刀打ちできない。

呆然として動きを止めていたが、生き残った猿たちが動き始めたこと
で意識は強制的に現実に引き戻された。

さつき糸に触れていた猿たちが一気に仕留められたことで糸をす
ごく警戒されている。

巨猿の動きに最新の注意をはらいつつ、猿たちに放電したり、雷刃
を飛ばしたりしていく。

巨猿はまったく動かない。

助けに来たわけではないのか…?

それならいいけど…いや、よくない。

ただ来たというだけでも強敵だ。

猿たちは石を投げたりして私たちを妨害していたが、糸が邪魔をして
届かないため、壁登りに専念するようだ。

まあ、元々私には当たってなかつたが…

魔力消費の少ない雷弾をばら撒いて体力を奪う。

そんな時、巨猿の1匹が動き始めた。

岩の方に歩いていく。

それは、カモフラージュのためにスライスした岩。
何を?

巨猿は軽く岩を持ち上げた。
え、どうすんの?

なんで、おおきく振りかぶつてるんでしょうかねえ？

岩が蜘蛛ちゃんがいる簡易ホームに向かつて飛んでいく。
危ないっ!!?

『雲魔法LV.1 雲作成』

雲で足場を作り、スピードとスキルで蜘蛛ちゃんを簡易ホームから回収する。

(うあああ…あ、あぶなかつたあ…ありがとう)

(それほどでも)

岩によつて巻き上がつた粉塵が晴れた先にはペシャンコに押しつぶされた簡易ホームがあつた。

うそでしょ!!?

あんなの食らつたら一瞬で御陀仏よ

幸い、巨猿の近くにもう岩はない。

でも、岩投げなら対処は簡単だつた。

岩がないということは違う方法で殺しにくるということ。

他の魔法に集中できるように蜘蛛ちゃん自身の糸で雲を壁に固定する。

その雲まで操つてる余裕は多分ない。

ここから、第2ラウンド開始だ

第2ラウンド

猿が壁を登つて押し寄せてくる。

蜘蛛ちゃんは糸を撒いて、私はひたすら放電し続ける。

麻痺させて糸に捕らえ、その間にできる限り電撃で仕留めていく。一回戦の繰り返しのようだが、変わったことがある。

猿たちは糸の厄介さを理解した。

捕らえられたら終わりだと。

だから、なるべく大きく身体を広げて糸にくつつく。

後続の猿が少しでも楽をできるように。

そうして出来た猿の道を後続の猿が進んでいく。

後続の猿も糸に捕まつた瞬間、身投げする。

自分の身を顧みない、狂気の戦略。

この猿は単純なステータスでも強いけど、その真価は群れでこそ発揮される。

どれだけ倒しても倒しても増援が来る。

猿を捕まえて盾にしようとしても自ら身投げする。

目的はただ一つ

自分の身よりも群全体での復讐を。

最後に敵を殺せたらいい。

ホントこの猿たちは狂つてる。

巨猿が現れて以来、新たな増援は来ていない。

このままいけば猿は全滅する。

でも、巨猿が動けば別だ。

猿の相手をしつつ、巨猿の動きを注意しなければならない。

ホントに勘弁してくれよ…

でも、蜘蛛ちゃんがいてくれてよかつた。

1人でこんな相手できるわけがない。

2人で見張れば隙も減る。

それでも、神経がすり減る作業だ。

集中のスキルがガンガン上がる。

『蒼電魔法 LV. 6 放電』

『経験値が一定に達しました。個体、雲猫LV. 17がLV. 18になりました。各種能力値が上がりました』

レベルアップしたみたいだ。

最近レベルアップがはやい！

ついに、巨猿が動き始めた。

動いたのはレベルが1番低い奴だ。

何をするのかと思えば、くるりとこちらに背を向けて歩き始めた。

帰つてくれるのか？と思つたけど、そんな甘いわけがなかつた。

巨猿は振り返ると一直線にこちらに走り始めた。

嘘だろ！？

『蒼電魔法 LV. 1 雷弾』

雷弾を当てて巨猿の勢いを削ぐ。

そこに蜘蛛ちゃんの投網が飛んできた。

引っかかった！

あれ？蜘蛛ちゃん？何を？

あーーー！

あ、あ、あの蜘蛛猛毒を直接口に…

蜘蛛ちゃん…恐ろしい子…

ちよつと巨猿に同情するよ…

南無…

巨猿の1匹が動いた。

他の2匹は？

遠く離れた地面を見ると、2匹とも居なくなつていた。
どこに！？

猿たちの道の上に巨猿の1匹はいた。

もうそこまで…

さつきまで地面にいたはずなのに…

移動速度が猿と比較にならない。

(蜘蛛ちゃん！横の壁!!?)

(くらえ！糸攻撃！)

巨猿は道になつてゐる猿を潰しながら向かつてきただけど、すぐに蜘蛛ちゃんの糸に捕縛される。

猿の進行方向にいるため、いい障害物になつてゐる。

『蒼電魔法LV. 6 放電』

痺れさせておく。

でも、これで2匹とも動いた。

最後の1匹はどこに…？

上昇するために上を見上げると、そこには今にも飛び降り、蜘蛛ちゃんを狙おうとしている猿がいた。

(危ないっ!!?)

戦いの終わり

『雲魔法LV. 4 雲分身』

『蒼電魔法LV. 6 放電』

くつ…うまく当たらない…

蜘蛛ちゃんが乗っている雲は壁から動かせない！
壁に固定したのが裏目に出てしまつた…

くそ、飛び降りた!!?

『蒼電魔法LV. 6 放電』

当たれ！当たれ！

『熟練度が一定に達しました。スキル『蒼電魔法LV. 6』が『蒼電魔法LV. 7』になりました』

ナイスタイミング!!?

これなら蜘蛛ちゃんを巻き込まない!!?

(蜘蛛ちゃん！飛び降りて!!?)

気づいた蜘蛛ちゃんが雲から飛び降りる。

『蒼電魔法LV. 7 落雷』

『経験値が一定に達しました。個体、雲猫LV. 18がLV. 19になりました。』

『各種能力値が上がりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『雲魔法LV. 5』が『雲魔法LV. 6』になりました』

『熟練度一定に達しました。スキル『無限話LV. 2』が『無限話LV. 3』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『MP超回復LV. 2』が『MP超回復LV. 3』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『HP自動回復LV. 2』が『HP自動回復LV. 3』になりました』

『熟練度一定に達しました。スキル『集中LV. 4』が『集中LV. 5』になりました』

おおふ…一気にきたな…

雲から飛び降りた蜘蛛ちゃんを背中に乗せる。

(大丈夫?)

(……)

(く、蜘蛛ちゃん?)

どうしたんだろう……突然飛び降りるとか言つたから怒つてる!!??

(……モフ……)

(え? なんて?)

(はあく……モコちゃんの上、めつちやくちやモフモフ……寝そ……)
(は!!? モフモフを堪能してただけかよ!!? 私の心配を返せよ!!?)

(ん? なんのこと?)

(なんでもない!!?) あと、人の上でくつろぐな!!?)

(何言つてるんだね、モコちゃん)

(何が!!?)

(モコちゃんは雲なんだから人の上とは言わないよ?)

(うるつさい!!? そういう細かいところはいいんだよ!!?)

でも、これで動ける巨猿はいなくなつた。

まだ生きてる巨猿も壁で糸に拘束されている。

残りの猿たちも、巨猿がせつかくの道を踏み潰してしまつたため、
思つたより進んでない。

なんらかの隠し玉があれば別だけど、猿たちに勝機はない。
でも、油断はしない。

もうこの世界が命懸けの世界だつて知つてゐるから。
絶対に気なんか抜いてやんない。

(ほら、シャンとしなさい! まだ動ける猿がいるんだから!)

(そうだつた! 行こう、お母さん!)

(誰がお母さんだ!!?)

(アハハハ)

く。
放電で猿の動きを鈍らせ、その隙に蜘蛛ちゃんが糸で拘束してい

それを続け、遂に最後の猿が糸に捕らわれた。

猿は諦めずに手を伸ばすが、ギリギリ届かない。

周りを見回す。そこらじゅうに糸に捕らわれた猿たちがいる。

念のため、援軍を警戒するが、来る気配がない。

遂に…すべての猿たちを行動不能に陥れた。

やつとだ…

でもまだ気を抜かない。

猿たちは動けないけど生きている。

(蜘蛛ちゃん、トドメを刺すよ)

(うん)

蜘蛛ちゃんは毒牙、私は広範囲に落雷を落として猿たちを仕留めていく。

今までで1番MPを消費した戦いだったよ…

『熟練度が一定に達しました。スキル『MP超回復LV. 3』が『MP超回復LV. 4』になりました』

ナイスタイミング!!?

猿たちは最期の抵抗に威嚇してくる。

でも、攻めてきたのはそつちなんだから、知ったこつちやない。

そうして猿にトドメを刺していると、不意に声が聞こえた。

『条件を満たしました。称号『無慈悲』を獲得しました』

『称号『無慈悲』の効果により、スキル『外道魔法LV.1』『外道耐性LV.1』を獲得しました』

なんか称号もらつた。

外道魔法ってなんだろう?

あとで蜘蛛ちゃんに聞いてみよう。

何か知ってるかも。

でも、これは遺憾の意を表明せざるを得ない。

私そんな外道じやないのに…

…ホントだよ!

とりあえず新しいスキルの確認は後回しにしよう。

戦つてる最中もなんかバンバンレベルアップしまくつてたし、後で時間のある時に全部まとめて確認しないと…

『経験値が一定に達しました。個体、雲猫がLV. 19からLV. 20になりました』

『各種基礎能力値が上昇しました』

『スキル熟練度レベルアップボーナスを取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『鑑定LV. 7』が『鑑定LV. 8』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『飛翔LV. 9』が『飛翔LV. 10』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『集中LV. 5』が『集中LV. 6』になりました』

『スキルポイントを入手しました』

『条件を満たしました。個体、雲猫が進化可能です』

猿を作業的に始末している最中に、レベルが上がった。
そうかー。

やつとレベル20か。

最初に比べてレベルの上がりがいいな。

スキル『惰眠』の効果かな。

私どんなところでも寝つき良いし。
猿が来たことに感謝すべきか：

うーん…いや、もう考えない！

とにかく、進化できるようになつてよかつた!!?』

『進化先の候補が複数あります。次の中からお選びください。』

雷雲

雷猫』

雷雲つてなに?

もはや生き物じやなくない?

まあ、あとで考えよう。

こんな安心できない状況で進化なんかできたもんじやない。

とつとと猿を全部始末しなければ。

そのあとは淡々と猿を処分する作業だつた。

雷刃、雷刃、たまに食事して、MP回復させて。

そして、その場から、私たち以外の命が全て潰えた。

L e t , s 進化!!?

さて、猿を全滅させたけど、これからどうしよう。

猿の血の匂いで他の魔物がやってくる可能性がある。

でも、さっきまであんなに騒いでいたというのにすごい静かだ。

魔物1匹やつてきている感じがしない。

今なら、進化できるかもしれない。

どうやら、さっきの戦いで蜘蛛ちゃんも進化できるようになつたみたいだ。

まあ、あれだけ倒したら経験値も貯まるよね…

2人（？）とも進化するから、安全を確保してからじゃないといけない。

また壁の高いところに簡易ホームを作れば 安心安全!!? とは言えないけど、弱い魔物なら近づくこともできないだろう。

進化するなら今しかないらしい。

（進化すると気を失うんだ。でも、前の感覚からしてそこまで長い期間じやないとと思う。あくまで感覚だけど。あと、進化には凄いSPを使うから大量の食料がないと危ない。だから、食料が沢山あつて魔物もいない今が絶好のチャンスだと思う！） b y 蜘蛛ちゃん

進化つて初めてだからよくわかんないから、ここは蜘蛛ちゃんに従おうと思う。だつて、わかんないしー

あと、進化するならどっちに進化するのか決めないとけない。

雷雲と雷猫。

めちゃくちや似てるけど、違う進化先ってことはかなり違うとみていいだろう。

うーん。

わかんない。

名前が似過ぎていてよくわからない。

こういう時、鑑定できればなー…

ん？ 鑑定が、できれば？

もしかしたら…

すぐさま自分を鑑定する。

ステータスの鑑定結果の方に、アラートがでてる。

進化可能？

なんか文字が点滅している。

ポチッとな。

〈進化可能：雷雲　o r 雷猫〉

：念の為、ポチッとな。

〈雷雲・雲種の成体。雷雲に命が宿つた。雷と水を蓄え、上空を漂つて
いる。数体集まると合体でき、強くなる。〉

〈雷猫・雲種の幼体。雷の身体をもつ。雷魔法が得意。数体集まると
力が増し、天候魔法を使えるようになる。〉

：すつつつづご！

凄いよ、鑑定さん！

最近鑑定してなくて、こんなに鑑定さんが育つてること知らな

かつたよ！

凄い！

最高!!?

（迷い中）

決めました！雷猫に進化するよ！

なんかもう成体になるよりも、幼体の方が未来があるじゃん？

そうと決まれば簡易ホーム作りだよ！

蜘蛛ちゃん！頼んだ！

なんということでしょー

あつという間に蜘蛛の巣がー

そこにふわふわの雲をくつ付けければ完成だよ！

さあ、レツツ進化！

進化つて初めてだから緊張するなあ

どんな感じだろ？

おやすみなさい！

『進化が完了しました』

『種族雷猫になりました』

『各種基礎能力値が上昇しました』

『スキル熟練度進化ボーナスを取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『蒼電魔法LV. 7』が『蒼電魔法LV. 8』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『雲魔法LV. 6』が『雲魔法LV. 7』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『天候魔法LV. 1』が『天候魔法LV. 2』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『MP超回復LV. 4』が『MP超回復LV. 5』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『HP自動回復LV. 3』が『HP自動回復LV. 4』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『気配感知LV. 4』が『気配感知LV. 5』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『無限話LV. 3』が『無限話LV. 4』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『外道魔法LV. 1』が『外道魔法LV. 2』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『外道耐性LV. 1』が『外道耐性LV. 2』になりました』

『進化によりスキル『電磁移動』を取得しました』

『スキル『飛翔LV. 10』が『電磁移動』に統合されました』

『スキルポイントを入手しました』

新たなスキル

グッドモーニング

おはようございます

無事目覚めたみたいですね
よかつたです

進化つてあんな感じなんだね。

凄い不思議。

蜘蛛ちゃんも無事進化できたみたい。
たしか、ポイズンな蜘蛛になつたんだよね
さてさて、早速ステータスを確認していきましょー！
鑑定！

〔雷猫〕 L V. 1 名前 雲間 なし 空

ステータス

H P 770 / 770 M P 850 / 850 S P 750 / 750

平均攻撃能力 : 950
平均防御能力 : 810
平均魔法能力 : 1130
平均抵抗能力 : 870
平均速度能力 : 1020

スキル

「雲猫」「鑑定L V. 8」「蒼電魔法L V. 8」

「天候魔法L V. 2」「雲魔法L V. 7」

「M P超回復L V. 5」「H P自動回復L V. 4」

「気配感知L V. 5」「暗視L V. 4」

「電磁移動」「念話L V. 10」「無限話L V. 4」「集中L V. 6」「怒
L V. 1」

「剛力L V. 4」「堅牢L V. 2」「瞬発L V. 5」「持久L V. 5」「外

道魔法L V. 2」「外道耐性L V. 2」

「惰眠」「n% I || w」

スキルポイント：148，800??
称号

「悪食」「魔物殺し」「魔物の殺戮者」「無慈悲」「惰眠の支配者」>

おおおーー！

ステータス上がってるう！

ついに1000を越えたよ！

やつたね！

喜びの舞を踊っちゃうよ!!?

（喜びの舞）

ハーハー

無駄に疲れた気がする。

とりあえずスキルを確認しようかな
あれ？

鑑定さんがレベル上がってる。

でも、違いがわかんない…

これは？

まさか使えない鑑定さんの再来!!?

ん？

スキルポイントのところにマークがついてる。
ポチッとな。

…………

すみませんでした！

使えないとか言ってごめんなさい！

貴方はめちゃくちゃ優秀でした！

そこには手持ちのスキルポイントで取れるスキルの一覧が表示さ
れていた。

ヤベーよ。ヤベーツすわ。

鑑定さんがヤベーツす。

鑑定さん最高!!?

そういえば前から欲しいと思っていたスキルがあるんだよねー

その名を『火耐性』という！

なに？案外普通のやつだつて？

別にいいじやん。欲しいんだもん

火耐性／火耐性／どこかな／

〈火耐性 使用スキルポイント：1000〉

は？

たつつか！

高すぎるだろ！

鑑定さんは100なのになんだよ1000つて

ふざけてんのか？

はあ

違うの探そ…

あっ！

似たようなのみつけ！

〈炎熱無効 使用スキルポイント：5,000〉

は???

なんだよこれ！

取らせる氣ないだろ！

火耐性よりも効果高そうだから欲しいけど！

絶対無理：

〈現在所持スキルポイントは148,800です。

スキル『炎熱無効』をスキルポイント5,000使用して取得可能

です。

取得しますか？』

え？

できんの？

うつそだろ!!?

ていうかそんなにスキルポイント持つてたの？
やつた！

取ります、取りまーす！

『『炎熱無効』を取得しました。残りスキルポイントは143,800

です』

やつてやつたぜ！

ん？

これは？

『怠惰・神へと至らんとするn%の力。自身を除く周辺のシステム内数値の減少量を大幅に増加させる。また、Wのシステムを凌駕し、M A領域への干渉権を得る』

n%の力？

『スキル『怠惰』をスキルポイント100使用して取得可能です。取得しますか？』

なんか凄そだし取つてみよう。

『『怠惰』を取得しました。残りスキルポイントは143,700です』
『条件を満たしました。称号「怠惰の支配者」を獲得しました』

『称号【怠惰の支配者】の効果により、スキル『睡眠無効』『退廃』を獲得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『禁忌LV2』を獲得しました』
わお。

いっぱいってきた。

【怠惰の支配者】つて？

『怠惰の支配者・取得スキル「睡眠無効」「退廃」・取得条件：「怠惰」の獲得・効果：HP、SP、MPの各能力上昇。自己回復系スキルに+補正。支配者階級特権を獲得・説明：怠惰を支配せしものに贈られる称号』

????……よくわかんないからほつとこ。

それにも『禁忌』つてなに？

なんか取つちやダメ系じやない？

どうしよ…

もう取つちやつたものは仕方ない。

うん。仕方ないんだ。

あとは…

『共有』？

鑑定ポチツとな

〈『共有』：特定の相手とスキルとスキルポイントを共有する〉

え？ 結構すぐない？

しかも使うスキルポイント500だよ!!?

取るしかないでしょ！

取ります!!?

《『共有』を取得しました。残りスキルポイントは143,200です》

さつそく蜘蛛ちゃんに教えて共有しよう！

蜘蛛ちゃん！

スキル『共有』

(蜘蛛ちゃん！)

(どしたん?)

(なんか、『共有』ってスキル取れて、スキルとスキルポイントを共有できるらしいんだけど、共有しない?)

(え!!? マジで!!? する!!? しよ!!? 共有!!?)

(じゃあ、早速共有!)

スキルオーン!

『スキル『共有』を使用しました。』

『熟練度が一定に達しました。スキル『集中LV. 1』を取得しました』

『集中LV. 1』が『集中LV. 6』に統合されました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『命中LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『回避LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『探知LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『隠密LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『暗視LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『外道魔法LV. 1』を取得しました』

『外道魔法LV. 1』が『外道魔法LV. 2』に統合されました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『毒耐性LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『麻痺耐性LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『石化耐性LV. 1』を取得しました』

した』

『熟練度が一定に達しました。スキル『酸耐性LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『腐食耐性LV. 1』を取得しました』

『『腐食耐性LV. 1』が『腐食耐性LV. 1』に統合されました』
『熟練度が一定に達しました。スキル『LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『恐怖耐性LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『気絶耐性LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『苦痛軽減LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『痛覚軽減LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『韋馱天LV. 1』を取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『禁忌LV. 1』を取得しました』

『『禁忌LV. 1』が『禁忌LV. 2』に統合されました』

ぐはつ：

あ…あたまが…

はあ…はあ…

頭割れたかと思った：

隣を見ると蜘蛛ちゃんも頭を抱えて悶えている。

2人（？）ともスキル多いからな…

（大丈夫…？）

（…うん。なんとか。モコちゃんは平気？…）
（平気じやない…頭割れたかと思った）

（だよね…）

（耐性いっぱい持つてるんだね…）

(うん。でも、種族特有のスキルは共有できないみたいだね)

(うん。私は糸出さないし)

(『怠惰』ってなに？それだけ共有不可って言われたんだけど)

(さあ？よくわかんない。さつき取った)

(そつかー)

(なんか疲れたね)

(そうだね)

スキル検証と…

さて、少し忘れてたけど進化で手に入れたスキルの検証をしようと思う。

えーっと…

レベルが上がったのは『蒼電魔法』と『雲魔法』、『天候魔法』、『MP超回復』、『HP自動回復』、『気配感知』、『無限話』、『外道魔法』、『外道耐性』の合計九つ。

たくさん上がったな。

まず、『蒼電魔法』

とりあえず、猿に撃つてみる。

そりやつ

『蒼電魔法 Lv. 8 雷爆』

雷は猿に触れた途端、爆発した。

…爆発した。

うわっ！

猿じやなくて壁に向かって撃てばよかつた…

でも、威力は高め。

次は『雲魔法』

Lv. 6も使つたことないから、使ってみよう

『雲魔法 Lv. 6 雲結晶』

おお、雲が結晶化した。

盾とかに使えそう。

Lv. 7は回復系なのか…今度使つてみよう。

次は、『天候魔法』

前に使つた時はなんか使えなかつたけど、使えるかな？

『天候魔法 Lv. 2 雨乞い』

シーン

発動した気配すらないよ!!?

ホントに意味がわからない。

全然使えないんだけど。

最後に、『外道魔法』

外道：どのくらい外道なんだろう

『外道魔法 LV. 2 幻痛』

シーン

まだよ!!?

もう知らない!!?

そのほかのスキルは、レベルが上がつただけだね。
獲得したスキルは、耐性をたくさんと、『電磁移動』っていうスキル。
さつそく鑑定！

〈『電磁移動』：電磁移動できるようになる〉

What?

違うよ！違うんだよ！

そんな情報は名前でわかるよ！

私が知りたいのはもつと、こう、効果なんだよ！

鑑定さんが久し振りに使えない!!?

もういいよ！

スキル『電磁移動』発動！

バチバチ

先端に行くほど白から黄色へのグラデーションになつていた体は、
雷になつた。

なるほど。だから、雷猫なのか。

雷になれるからスピードも速くなると。

いいね！雷かっこいい！

（白ちゃん、スキルの確認終わつたよー）
(私も終わつた)

（久し振りに模擬戦しない？）

（いいよ。でも、雷と毒は禁止だよ）

（攻撃には使わないと約束しようではないか!!?）

（嫌な予感：）

（じゃあ、5秒前ー）

（えつ！ちょ：）

(よーん、さーん、にー、いーち)

((ゼロ！))

白ちゃんがすごいスピードで移動して投網してくる。

でも、スピードなら私も負けないよ！

私は今、雷になる!!?

『電磁移動』！

(え!??)

続けて：

『雲魔法 L V. 5 幻雲』

『雲魔法 L V. 6 雲結晶』

この結晶が私に見えるように幻をかける。

蜘蛛ちゃんが結晶に向かつて投網をした。

狙い通り!!?

『雲魔法 L V. 1 雲作成』

『雲魔法 L V. 2 雲操作』

雲を糸状にして確保ー。

(うわっ!)

(勝った!)

(負けたー)

私は喜びの舞を踊り、蜘蛛ちゃんは地面をゴロゴロ。

うん、この展開、前にもあつたよね。
だから、この後は決まって、

ズシン

めちゃくちや強い奴が出てくるんだよお!!?

△地龍力グナ L V. 26

H P : 4 1 9 8 / 4 1 9 8 (緑)

M P : 3 3 3 9 / 3 6 5 4 (青)

S P : 2 7 9 8 / 2 7 9 8 (黄)

: 2 9 9 5 / 3 1 1 2 (赤)

ステータスの鑑定に失敗しました』

それは、
それは、
龍。
圧倒的強者である。

オリジナル設定

ステータスとオリジナル魔法

雷猫 L V. 1 名前^{雲間}無し

ステータス

H P 770 / 770 M P 850 / 850 S P 750 /

平均攻撃能力 : 950

平均防御能力 : 810

平均魔法能力 : 1130

平均抵抗能力 : 870

平均速度能力 : 1020

スキル

「雲猫」「鑑定L V. 8」「蒼電魔法L V. 8」

「天候魔法L V. 2」「雲魔法L V. 7」

「M P 超回復L V. 5」「H P 自動回復L V. 4」

「気配感知L V. 5」「暗視L V. 4」

「電磁移動」「念話L V. 10」「無限話L V. 4」「集中L V. 6」「命中L V. 1」「回避L V. 1」「探知L V. 1」「隠密L V. 1」「怒LV. 1」

「剛力L V. 4」「堅牢L V. 2」「瞬発L V. 5」「持久L V. 5」「外道魔法L V. 2」「外道耐性L V. 2」

「腐食耐性L V. 1」「毒耐性L V. 1」「麻痺耐性L V. 1」「石化耐性L V. 1」「酸耐性L V. 1」「恐怖耐性L V. 1」「氣絶耐性L V. 1」「苦痛軽減L V. 1」「痛覚軽減L V. 1」「韋馱天L V. 1」

「炎熱無効」「睡眠無効」「退廃」

「禁忌L V. 2」「惰眠」「怠惰」「n% I || w」

スキルポイント : 143, 8200

称号

「悪食」「魔物殺し」「魔物の殺戮者」「無慈悲」「怠惰の支配者」

『蒼電魔法』

L V. L V. L V. L V. L V. L V. L V.

8 7 6 5 4 3 2 1

吹雪 干天 暴風雨 暴風 雪 あられ 雨乞い 快晴

??

L V. L V. L V. L V. L V. L V. L V.

1 0 1 9 8 7 6 5 4 3 2 1

雷劍 雷爆 落雷 放電 雷刃 雷の牙 雷槍 雷彈

??

『雲魔法』

L V. L V. L V. L V. L V. L V.

1 0 1 9 8 7 6 5 4 3 2 1

電磁砲

??

L V. L V. L V. L V. L V. L V. L V.

1 0 1 9 8 7 6 5 4 3 2 1

雲作成 雲隠れ 雲操作 雲分身 幻雲 雲結晶 愈し雲 冷冰氣 氷槍 雲移動 ??

??

『天候魔法』

L V. L V. L V. L V. L V.

8 7 6 5 4 3 2 1

??

L V. L V. L V. L V. L V.

8 7 6 5 4 3 2 1

??

??

L V. 9 真空

L V. 10 ブラックホール

雲猫

幻想種。雲族の幼体。基本遙か上空で集団で生活している。個体数が多ければ多いほど魔法の威力が上がる。

(雷雲)

雷雲に命が宿つた。雷と水を蓄え、上空を漂っている。数体集まると合体でき、強くなる。

『合体』『分離』

雷猫

雷の猫。雷魔法が得意。数体集まると力が増し、天候魔法を使えるようになる。

『電磁移動』

(雷虎)

雷の虎。雷魔法が得意。単体で天候魔法が使えるようになった。

『天雷魔法』

蒼雷虎

雷虎の上位種。強力な雷でできた身体は青白い。蒼電魔法の威力が大幅に上がる。天候魔法と雲魔法も得意。自由自在に大空を駆ける空の覇者。成長すれば天変地異を起こせるほどの力を持つ。

『空駆』

蜘蛛ちゃん

スマールレツサータラテクト→スマールタラテクト』→スマールポイズンタラテクト→ゾア・エレ→エデ・サイネ→ザナ・ホロワ』→アラクネ』→神

モコちゃん

雲猫』→雷猫』→蒼雷虎』→神

流れ

転生当初

蜘蛛子と生活

猿戦

中層 ??

外の世界と転生者

魔王

古代文明

進化と力

雪山

お出掛けと魔王城

暗躍

エルフの里と転生者

選ぶもの

灼熱地獄

こんにちは中層！

字。 そいつの、 地龍力グナのステータスを見た時の感想はたつた一文

は？

(く、く、く、蜘蛛ちゃん！なにあの化け物！)

(私が知るか!でも、今やる」とはひとつ)

(逃げる!)

全速力で少しでも遠くへ遠くへ逃げる。

に口に光を集め始めた。

もしやあれば異世界のドテコンで定番『アレス』というものでは

あつ！ というかあんなのに当たつたら一瞬で死ぬ!!?

(蜘蛛ちゃん！登り坂!!?)

(おお! 遂にこの地獄の下層から抜け出せる!)

さようなら下層！

でも、世界はそんなに甘くないのである。

目の前に広がるのはマグマが湧き上がり、

けるほどに熱い灼熱の大地。

いくらなんでもこれはないだろ!!?

現状の確認をしよう。

周りは煮えたぎるマグマが流れている。

『炎熱無効』のおかげでダメージは受けてないけど熱い。
スキルで無効化されていても熱さにならない。

生まれ変わつてからずつと暑くも寒くもない快適な気温の中でも生活してたからね。

今すぐこの中層から出たいけどあんな化け物がいるところには戻りたくない。

そうだ。蜘蛛ちゃんは種族柄炎が苦手なはず…

(蜘蛛ちゃん大丈夫?)

そう声をかけて振り向くと、お尻が燃えている蜘蛛ちゃんがいた。

(く、く、くもちゃん! 燃えてる!)

(え? この中層はどこでも燃えるよ?)

(違う! 糸! 糸! 糸切つて!)

(糸? つて、うわあああ!)

ようやく気づいた蜘蛛ちゃんは慌ててお尻から出ていた糸を切った。

(あ、危なかつた……あれ? HP減つてない)

(私が『炎熱無効』持つてるからね。今スキル共有してるし)

(ありがとう、モコちゃん! 君のおかげで間抜けな死に方をしなくて済んだよ! 命の恩人!!?)

そんな大袈裟だよ! 急にやめてよ! 照れるじyanか!!?

こういう時は話題を変える!

(それにもこの中層を抜けないと上層には戻れないんだよね)

(うん。上層や下層があんなに広かつたんだから中層も相当広いに違いない。大陸を繋ぐくらいだし。あー。一体何日かかるんだろう…)

(気にしない方がいいよ。気楽にいけばいつか終わるさ)

お、魔物発見。

鑑定!

ヘルローゲネラツシユ LV. 5
ステータス

H P : 159 / 159 (緑)

M P : 145 / 148 (青)

S P : 145 / 145 (黄)

116 / 145 (赤)

ステータスの鑑定に失敗しました
中層についてから始めてみる魔物。
タツノオトシゴみたいな魔物だな。
マグマの中を悠々と泳いでいる。

こつちに気づいてなさそうだし、スルーしたいけど進行方向にいる。

ここは一戦やつておくか。

中層でも同じように戦える試しておきたい。

蜘蛛ちゃんも同じ意見みたい。

まず、蜘蛛ちゃんが糸を飛ばす。

けどオトシゴに届く前に燃えてしまつた。

今までずっと使ってきた糸が使えなくなつてちょっと凹んでる…

あ、なんか飛んできた。

火の玉か。

じやあこつちは雷の玉だ！

『蒼電魔法LV. 1 雷弾』

相殺したかと思えば、雷弾の威力の方が強かつたらしく、オトシゴに当たつた。それで火の玉は効かないと気づいたのかマグマから這い出してきた。そのまま突進してくる。

馬鹿だなー。火の玉が効かないのにただの突進が効くわけないじゃん。

私だつたら戦略的撤退するのに。

遅い突進を避けて魔法を使つて拘束する。

『雲魔法LV. 1 雲作成』

でも、熱すぎるせいで蒸発し始める。

そんな!?

蜘蛛ちゃんはオトシゴの背中に取り付き、爪に毒攻撃を乗せて突き刺す。

猛毒に侵されたオトシゴはコロつと生き絶えた。

初戦はなんとか突破。

でも、ずっと頼りにしてきた雲が蒸発するなんて…
でもでも！ ちよつとの時間なら使えるし！

しかし中層、最大の敵は地形かもしねん。

私が考え込んでいると蜘蛛ちゃんが話しかけてきた。

(モコちゃん、大丈夫？)

(うん。お互い今まで頼りにしてきたものが使えないね…)

(うん)
(オトシゴ刺した時にHP減らなかつた？ あいつマグマの泳いでた
し)

(うん。減つた。痛かつた…)

(回復させようか？)

(できるの？ お願いお願い！)

(うん！)

『雲魔法LV. 7 癒し雲』

雲が霧のように広がつた…ら、すぐに蒸発し始めた。

(うー。回復手段が…)

(ちょっとしか回復しないね…まあ、元気だしなよ)

(うん)

(回復ありがとう！)

(つ！！？べ、別に普通だよ！)

(なんで急にそういうこと言うんだよ！
照れるじゃんか!!?)

野生のナマズが現れた！

さてと、当分の目標はこの灼熱地獄から抜け出す道を探すことかな。

ダメージないとはいえ熱い。体が蒸発しそう。とにかくここから出たい。

（蜘蛛ちゃん、望遠でなにか道っぽいもの見えたなら教えて！）

（りょーかい！）
そういうえば…さつきのタツノオトシゴ、下位の竜つて鑑定に出てたな…

はい、ここで連想ゲーム！

下位の竜といつたら上位の竜、上位の竜といつたら龍、龍といつたら地龍：地龍がいるなら風龍、地龍がいるなら火龍…：

そして火龍がいそうな場所は：ココですね!!?

：ヤバい。この灼熱地獄には火龍がいるかも知れない。

逃げる準備はいつでも万端にしておかないと！

（うわっ!!?）

繋ぎっぱなしにしている念話から蜘蛛ちゃんの叫び声が聞こえる。
(どうしたの!!?)

（急にナマズっぽいやつがマグマから飛び出してきたからびっくりしちゃった）
(そつか、たしかにナマズだね)

こんな時は鑑定！

〈エルローゲネセブン LV. 7

ステータス

H P : 461 / 461 (緑)

M P : 223 / 223 (青)

S P : 218 / 218 (黄)

451 / 466 (赤)

平均攻撃能力 : 368

平均防御能力 : 311

平均魔法能力：161

平均抵抗能力：158

平均速度能力：155

ステータスの鑑定に失敗しました〉

〈エルローゲネセブン：エルロー大迷宮中層に生息する下位竜に属する魔物。雑食性でその大口により何でも飲み込む〉

えつ：こいつ竜なんだ。丸いフォルムは竜っていうよりもナマズ。あの大きな口で迫つてこられたら簡単に飲み込まれちゃう。

速度で上回つてから避けれるし、万が一飲み込まれても消化される前に体の中から放電してやれば脱出できるつしょ。

でも、能力がわからない限り出来るだけスルーしたい。私たちの目的は戦うことよりも中層からの脱出だし。

（モコちゃん、そーっと移動しよう）

（そうだね）

（最近私は学習したのですよ。調子に乗つてはいけない。慎ましやかにいかなきやならんのですよ。）

なんか、蜘蛛ちゃんが突然語り始めた。そんなことよりも急いで移動したほうが…

すると、すぐ近くのマグマの底から、別のナマズが浮きってきた。（は？・うおい！？話が違うぞ！？私調子に乗つてないのにピンチだぞ！？）

さつき語り始めたからだよ…それに話つて誰とだよ…

固まつてナマズと見つめ合つていた蜘蛛ちゃんはナマズが大口を蜘蛛ちゃんに向かつて閉じる直前にバックステップする。

ナイス！バックステップ！っていう謎の掛け声が無ければな良し！

ナマズはのつそりと陸地に上がつてきた。

マグマの中にいる時は分からなかつたけどちゃんと鱗あるな。手足もある。

（うん。逃げよう）

くるりと踵を返した蜘蛛ちゃんの前にはのつそりと陸地に上がつてくる別のナマズ。

これでやつと逃亡を諦めたようすの蜘蛛ちゃん。

(やつてやるぜ!)

糸を放つが案の定すぐに燃える。そして、口を開けて突進するナマズ。それを見つめる私とナマズ2。蜘蛛ちゃんは動かない。動かないことに疑問を持ちつつ、助けに入ろうとした時、蜘蛛ちゃんは動き出した。

ギリギリまで引きつけたナマズの口の中に毒を放つて離脱。

蜘蛛選手、鮮やかな戦法です!…じやなくて怖いな!

毒飲み込んだナマズは苦しげにのたうち回っている。

うわあ:

ナマズ2も引いてるよ…

あつ…ナマズ2が逃げようとしてる。

逃がさんぞ!

『蒼電魔法LV. 2 雷槍』

雷槍で地面に縫い付けるとその威力にナマズはたちまち絶命した。案外強くなかったな。

蜘蛛ちゃんの方もトドメを刺せたみたい。

じやあ、早速食べて見なくちゃ!

毒はなさそうだから美味しいといいなあ…

じやあ、蜘蛛ちゃん!鱗取り任せた!!?

(そんな!!?)

(ほら、私雷だから♪その間私は中層を走つてk:偵察してくるから♪)

(今、走つてくるつて言いかけなかつた?ちゃんと偵察してきてよ!-りよーかい、りよーかい!)

私に任せろ!

偵察♪偵察♪

ふうんふふふ♪♪

走るのって、たーのしーいなー♪

転生してから走るのがすごい楽しくなつた。

なんでだろ？ううん：不思議

まあ、いつか♪

それにして中層は眩しすぎて目が痛くなるなあ
視界は赤、オレンジ、黄色、白で埋め尽くされている。

何が言いたいかというととにかく眩しい。目が痛くなるくらい。

誰だよ、こんな誰にも需要がなさそうな場所を作った奴は。

いつかあつたらぶつ飛ばしてやる！空の彼方までな！

そんなことは置いといて

魚系の魔物が多いなあ

マグマの中にタツノオトシゴとナマズ、陸地に犬と…なんか丸い物体。

いや、何あれ？

え、怖：理解不能だわ：

理解不能な生物のことは頭から追い出す。

うん、私は何もみていない！見てないと言つたら見てないのだ！

…でも、もと地球人の私からすれば魔物は理解不能な生物だな：

え？…つていうことは魔物に転生した私は理解不能な生物つてこ

と！？

いやだー！そんなの断固拒否するぞー

これは、なんとしてでも人の姿になれるようにならなければ！！
ん？なんかあつちでマグマからひょろ長いものが顔を出してる。
なんだろ？

つて、鰻じやん!!

鰻つてあんまり食べたことないんだよね。食べたい！！

あれ？なんかこつち見られてない？
うぎやああああああ！？

な、な、な、なんかレーザー撃たれた!?
こつちくるなああああ!!

はあ…はあ…はあ…

むり。あれは一人じやむり。蜘蛛ちゃんに救援を頼まなければ。
そうと決まれば、すぐに戻ろう!

L e t , s l a g o ! g o !

あ、蜘蛛ちゃんがみえてきた。

まだ鱗とつてる

…あれ?なんか忘れてるような…

あ!!偵察してない!

あわわわわわ!

と、とりあえず、中層を抜け出す道を探さねば!

私は今、音速を超える! 蜘蛛ちゃんに見つかったら一巻の終わりだ
! ずっと遊んでたつてバレちゃう!

えーっと、えーっと、なにか成果を持つて帰らないと!
道! 道! みち!どこ!?みちい:

バ、バレたらナマズを食べれない予感…

それだけはいやだー!

・

・

中層、5周くらいした気がする。

まさか、脱出口ないの!?

…あ!!あつた!あつたよ!!

さくてさて、どこに繋がってるかな〜?
ゆきあし、さしあし、しのびあし〜

この暗さ、この気温、この感じ(?)!

これは、上層!

ということで、上層への道を無事に見つけたよ!
や、やつた…これで無事にナマズを食べられる!!

今度こそ蜘蛛ちゃんに報告だー！

(くーもちゃーん！ただいまー!!)

(おかげり…やつと鱗取り終わつたよ…)

(おつかれー)

(ふう…で、なにか収穫はあつた？)

(もちろん！聞いて驚き、ひれ伏すがいい！なんと！)

(なんと？)

(鰻を見つけたよ！きつと美味しいよ！)

(でかしたモコちゃん！つてそうじやなくて！地形については!?)

(地形?…あ!!)

(よかつた：一瞬ないのかと思つたじやん…)

(嫌だな♪私はそんなヘマはしないよ♪)

(で?)

(聞いて驚き、ひれ伏すがいい！なんと！)

(あ、もうそれはいいから)

(ひどい!)

(ほら、早く話してよー)

(分かつたつて！「ホン！では、発表します！なんと！今回の調査で上層に行く道を見つけたのです！」)

(でかした！)

(ハツハツハー！ということでナマズパーティーだー！)

(おうよ！)

ナマズー

さあ、大変長らくお待たせいたしました！いよいよ、ナマズの実食です！

中層の魔物つてマグマの中にいるから熱々だけど少し待てば程よい熱々になるからいいよね。上層には存在しなかつたあつたため機能！それはマグマ！あんなに弊害だつたマグマが役に立つ日が来るとは…！

でも、蜘蛛ちゃんは待つ時間があんまり好きじゃないみたい。私は目的のためならいつまでも待てるよ！

では、いただきます！

…え!? 美味しい!! すっごい美味しい！ 雲生でこんな美味しいもの食べたの初めて!! めちゃめちゃ美味しい！

『炎熱無効』あるし、マグマに入つてでも狩り尽くそうかな……身体は雷だから蒸発しないし。でも、痛みはあるんだよなあ…やめよ

とにかく今は！これを味わうのさ。

『熟練度が一定に達しました。スキル『味覚強化LV. 1』が『味覚強化LV. 2』になりました』

・ · ·

…ツハ！

気づいたら食べ終わつてる…
めっちゃ美味しかつたなあ…

前世はそんなに固執してなかつたけど、すごい恵まれていたことを実感したよ…

カツラーメンですら高級品になり得る！

カツラーメンすげー

もう不味い魔物は嫌だ！

美味しいものが食べたい！！

ということで！

さあ、ナマズコール！

（ナーマーズ！

ナーマーズ！

ナーマーズ！）

（えー、出てきませんね、蜘蛛教授）

（くそ！出てほしくない時は勝手に出てくるくせに、出てきて欲しい時には出てきやしない。早く出てこいや。そして私に食わせろ）

随分気が立つていらっしゃいますねえ。

そして、こういう時に限つて違うやつが出てくると決まつてているのだ。

〔エルローゲネラッシュ LV. 8

ステータス

H P	: 170	/ 170	(緑)
M P	: 161	/ 161	(青)
S P	: 158	/ 158	(黄)
	: 156	/ 167	(赤)

平均攻撃能力 : 87

平均防御能力 : 84

平均魔法能力 : 84

平均抵抗能力 : 81

平均速度能力 : 91

スキル

「火竜LV. 1」「命中LV. 4」「遊泳LV. 4」「炎熱無効」

やせいの タツノオトシゴが あらわれた

鑑定様すげー。もうチートだね。

ていうか、タツノオトシゴ弱すぎじゃね？

しかもスキル四つって：

うん、こいつらには負けようがない。

寝ても負けなさそう。いや、それは流石に無理か。

(おりや!)

ん？石？あれ…でもHP減ってる。なんで？

(毒を塗つてみたんだ)

(すご！でも、こつちに投げないでね)

(当たり前だよ！私をなんだと思ってるの！)

(猛毒使い)

(否定できない…)

(まあ、今回は任せたまえ！)

『蒼電魔法LV. 8 雷爆』

うわあ…爆発したからちよつとグロい…

これはあんまり使えないなあ。強い奴には効きそ娘娘。

まあ、討伐完了！

冷ましてから…いざ、実食！

…うん。不味い。ナマズ食べた後だから余計に不味く感じる。

鰻なんか嫌いだ!!

ナマズを狩り尽くさねば!

私はもつと美味しいものを食べたいんだー!

食べれないなら殺してでも奪い取れー!

はい、ということで今日も今日とてナマズ探し。
相変わらずマグマで蒸発しそうな中層でござります。まあ、しない
けど。

マグマ無くならないかな…

そういうえば、中学生の時、七夕の短冊に『この世からテストという
概念が無くなりますように』って書いたことあるのに叶わなかつた
なあ：

でもマグマ無くならなつたら、マグマの中にいた魔物たちが跳ねま
くるかも。それはやだな。究極の選択。

(蜘蛛ちゃんはどうちがいい?)のままか、マグマが無くなる代わり
に魔物が陸に上げられた魚の如く跳ねまくるか)

(マグマが無くなる方がいいかな)

(ちなみに理由は?)

(だつて毎回マグマから出すの面倒だし、蜘蛛毒を撃ちまくつたら倒
せるし)

(哀れ。まものたちよ。同情するよ)

(いや、モコちゃんが聞いてきたんじやん!)

(そつち選ぶと思わなかつた。私は魚じゃなくて肉派だから、魚嫌い)
(なんか話すれてない!? ナマズ探しは!?)

あつ…

(忘れてないよ)

(いや、絶対忘れて(忘れてないよ)…わす(忘れてないよ)…はい)
これで良し。

こんな会話してゐる間に出てきてくれたね。

(念願の鰻が!!)

(まつて！鰻なの!? ナマズどこ行った!?)

(消えた!!)

(消えないで!!)

エルローゲネレイブ
LV.
2

アーティスト

H
P
: 1001 / 1001 (緑)

S P : 8999 / 899 (黃) M I : 5 (青)

$$\begin{array}{r} \vdots \\ 9 \\ 7 \\ 1 \\ \hline / \\ 9 \\ 7 \\ 1 \end{array} \quad (\text{赤}) + 57$$

平均攻擊能力 : 893

平均魔法能力 : 454

平均抵抗能力：433

平均速度能力：582

卷八

火龍 LV 4 龍鱗 LV 5 火強化 LV 1 命中 LV 10

5 「炎熱無効」 「生命LV. 3」 「瞬発LV. 1」 「持久LV. 3」 「強回避LV. 1」 「確率補正LV. 1」 「高速遊泳LV. 2」 「過食LV.

力LV.
1」「堅固LV.
1」>

おおー 外ツノアトジよりモアガル多いなあ
あつ!豆腐卿能刀負サニセー 切めこの敗北。

だがしかし！それ以外は勝ってるし！こいつは問題なく倒せる

(フラグ?)

（ねえ、蜘蛛ちゃん。なんか鰻がブレて見えるんだけどおおおおおおん？なんか鰻の軒亭かかーれてる！）

!?

あぶねー、当たるところだつた…

ていうか、火球出すなら言えよ！いや、無理か。

（それは予見が発動してゐる証拠だよ！少し先の動きがブレて見えるんだよ）

便利だね！

でも、すごい避けにいく。
なんで？

『確率補正：確率が関与するスキルの力にプラス補正が働く』

お前だな、犯人は！たいほー！

こんな時には：

集中だー！

『熟練度が一定に達しました。スキル『集中LV. 6』が『集中LV. 7』になりました』

ナイスタイミング♪

こんな魚には負けない！

火球で焼こうとしてくるんだから逆にこっちから焼かれても文句ないよね！

自分でやつたことは巡り巡つて返つてくるんだよ。

……よし！正当防衛だ！焼き魚になれええええ！

『蒼電魔法LV. 7 落雷』ツ！！

鰻のHPが急激に減っていく。

w i n !

かと思つたら、HPが急速に回復していつた。
は？

なんで？

(スキル『火竜』のレベル3『生命変遷』だよ！SPを消費してHPに
変えるみたい。ずるい！)
は？

ふざけんなよ!!

鰻め！鰻なんか嫌いだ！！

鰻退治と蜘蛛ちゃんの進化

鰻を倒したと思ったら、復活しやがった件。

(もう嫌だ！蜘蛛ちゃんバス！)

(え？まあ、いいけど。どういことで覚悟しろ鰻！)

蜘蛛ちゃんは鰻に糸を巻きつけた。何するんだろう？燃えてるけど。

鰻が動きを止めたその瞬間、猛毒の水玉が鰻の顔にいくつも当たった。

目と口に直接毒を入れるなんて……容赦ない……

鰻が糸を引きちぎつて暴れる。

うわあああ……

なんか口から火球出そうとしてない？

暴れたまま火球とか出されたらどこに飛ぶかわからなくて危ない

!!

と、とどどりあえず、広範囲の攻撃……広範囲……広範囲……

『蒼電魔法LV. 6 放電』ツ！！

『経験値が一定に達しました。個体、雷猫がLV. 1からLV. 2になりました』

『各種基礎能力が上昇しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『集中LV. 7』が『集中LV. 8』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『集中LV. 8』が『集中LV. 9』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『剛力LV. 4』が『剛力LV. 5』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『堅牢LV. 2』が『堅牢LV. 3』になりました』

(あばばばばばばばッ?!?)

(蜘蛛ちゃんああああああんん!?)

『雲魔法LV. 7 癒し雲』

(う、うめんなさい…つ、つい…うにようによ動いてるのが気持ち悪くて…)

(大丈夫だよ…でも今度から合図とかして…)

(了解!)

(勝つたね!)

(うん。次あつたらスキル使用される前に一撃で仕留めてやる)
(さてと、鱗を取るのですが、さつき痺れさせられたので)

(う…やります…)

(やつた!)

くそお…

仕方ない。やろう。

楽にやりたい。

鋭いものでもあればいいんだけど…
あ!

『蒼電魔法LV. 3 雷纏い』

これで、爪のところだけに纏つて一閃する!

すると…

スッて簡単に切れるようになる!

どうせなら食べやすい大きさにカットしてつと…

(蜘蛛ちゃん、終わつたよー)

(え?!早つ!!しかも食べやすくカットされてる!!)

(ふふん)

(これからも鱗取りやつてよ)

(うえつ!?まあ、結構すぐ終わつたしいいけど…)

(よつしや!!)

(そんなに嫌だつたんだ：鱗取るの…)

(当たり前じやん！取りにくくし！めんどくさいし！)

(じゃ、いつただきまーす)

(いただきまーす)

うまい。

ナマズとはまた違う味わい。

うまい（↑大事）

S Pも回復するし、美味しいし、いいこと尽くめ！鰻がうにようによ動くことを除けば！

（モコちゃん、進化できるようになつたんだけどどつちがいいと思う？）

（選択肢は何があるの？）

（ポイズンタラテクトか、ゾア・エレ）

（うーん…何が違うの？）

（ポイズンは多分今の姿から成体になるんだと思う。ゾア・エレは特殊進化っぽい）

（蜘蛛ちゃんはスピードに特化してるし、成体になるよりも小型の方がいいんじゃない？）

（なるほど）

（ていうか、蜘蛛ちゃん食べるの早くない？同じ量で分けたはずなのに…）

（まあね。進化中は意識なくなるから守つてよ）

（いいよー。任せて！鰻食べながら見てる）

（じゃあ、進化ー）

進化つて不思議だよねー

（おはようございます）

（はい、おはようございます。無事に進化できたみたいだね）

（うん、ありがとう。…それ、何やってるの？）

（え？お絵描きだよ？）

鰻を食べ終わつた私は暇になつたので絵を描いています。
雷で。空中に。

扱いが上手くなれば出来ることが増えるしね！（多分）
主な理由は暇だったからなんだけどね。

ちなみに今書いてるのはマ○オとル○ージー。

この二人つて確か攻撃に二回当たつたら死んじやうんだよね。

紙装甲だ。

（ん？ はえつ！え、ええええええええええええええ！？）

叫び出した蜘蛛ちゃん。

（ふふふ。く、くくく。くへへへへへへ）

叫んだと思つたら急に笑い出した。大丈夫か？

（おおい!?ま、まだ大丈夫。半分だし）

笑つた後は慌てだした。何が半分だよ

感情が変化しすぎじゃね？

（えーっと、蜘蛛ちゃん大丈夫？）

（おお！モコちゃん聞いてくれ！紙装甲じゃなくなつたんだよ！戦闘力も上がつたし！スキルのレベルも上がつたし！）

（それは良かつた！急に叫んだかと思えば、笑い出すし、そのあと慌て出すしごつくりしたよ）

（ごめんごめん。早速なんか狩りに行こう！）

（新技能をチエックするのか。じゃあ私はみてるね！）

（うん！期待してみてて！）

えー、私は今回のタツノオトシゴ2匹（ナマズ）v s 蜘蛛ちゃんを実況させていただきます。モコちゃんと呼ばれているものです。

蜘蛛選手、先制攻撃。投石です。

なんと、前はHPを5、6減らす程度だつた投石でHPの三分の一近く削りました。すごい成長ぶりです。

おつと、ここでマグマの中からナマズか浮上してきました。

同じ進化系のタツノオトシゴがピンチに陥っているので助太刀でしょうか？

蜘蛛選手、少し動搖しております。

ナマズから火球攻撃！しかし、蜘蛛選手、軽々とかわします！

ナマズは実力差を感じ取ったのか逃げようとしています。

蜘蛛選手、逃がさない！

邪魔するタツノオトシゴを前足の鎌で斬り捨てました！

素晴らしいですね！

しかし、自分でびっくりしている間にナマズに逃げられてしましました。

嘆いています。

そして、もう一匹のタツノオトシゴにその怒りをぶつけ始めました

！

ん？急に倒れましたねえ…

麻痺毒でしようか？

本人に確認を。

（蜘蛛ちゃん、今のは麻痺毒？）

（うん、でも弱毒だけでこんなになるとは…）

なんと！ただの麻痺毒のようです！

それだけでここまでダメージが入るとは…蜘蛛猛毒ではどうな

るのか、考えるだけで恐ろしいです。

蜘蛛選手の戦闘能力向上がわかる戦いでした。
ありがとうございました。

今日、私たちは大発見をした。

なんとそこにはクリスマスツリーとレターセットがあつた。

What?

なんで？

このマグマ地帯にクリスマスツリー??

(・・・ハツ！これは、サンタさんが私たちにプレゼントをあげるよと
いう意思表示なのでは！？)

(いや、サンタさんがここに来れないと思うよ。あんな太つたおじさん
が来たら燃えなちやうよ。マグマに落ちそうだし)

(じゃあ、これはどう説明するのさ！？)

(幻?)

(んなわけあるかッ！とりあえず手紙にプレゼント書いてみようよ。
それで来たらいる。来なかつたらいない。ただそれだけ)

(んく、そだね。書いてみよう。來るのがブラックサンタじゃないと
いいけど)

(えつ！怖いこと言わないでよ)

(ブラックサンタが来ても盗られるもの何もないよ？もしじやがいも
と石炭貰つても私たちにとつては美味しい食料貰えるからいいこと
しかないし)

(そうだつた！むしろ来てくれた方が食べ物たくさん貰えるじやん)

クリスマスプレゼントかく

いつも何頼んでたつけ？

うーん・・・思い出せないや。

(蜘蛛ちゃんは何頼むの？)

(そりやあもちろんチキンとケーキだよ！)

(クリスマスの定番料理だね。私の分も頼んでおいて)

(オッケー！チキンの丸焼き2つとショートケーキをワンホールくだ
さい・・・つと。モコちゃんはどううおおおああああああああああああああ！？)

(どしたの？)

(て、てててて手紙が、きき、き消えたあ！)

(え？)

(ホントなんだよ！なんか書き終わつたらシユワアアアアアアアアつて消

えたの!!)

(それつて・・・サンタさんに届いたんじゃないの？)

(言われててみればそうかも！)

(もう一つのお願いはどうする？)

(スマホくださいつてのはどう？)

(でもインターネット繋がつてなくね？)

(たしかに：)

(あつ、決めたよ)

決めた内容を紙に書くと手紙は空中に溶けるように消えていった。

(まつて！なんで書いたの？)

(人化的スキルが欲しいですつて書いたよ。スキルならずつと使える
し、クリスマス料理は人の姿で食べたいでしょ？)

(ナイス！早く寝ようよ！)

うん、寝よ寝よ！

サンタさんが来ますように。

おやすみなさい！

＼翌朝／

(起きろおおおおおうう!!!)

(うわあああ?!)

今日の目覚ましは蜘蛛ちゃんの叫び声。

寝起きはもちろん最悪。。

(はあ、なに？蜘蛛ちゃん)

(ほら！クリスマスプレゼント！来てるよ!!!)

(え、サンタさん来れたの？)

正直あんまり期待してなかつたから何頼んだか忘れちゃつたけど、
嬉しい。でも、マグマ地帯に来れるつてサンタさんはかなりの強者
説。

ツリーの下には小さいプレゼントと大きなプレゼントがひとつずつ。

(どつちから開ける?)

(小さい方から開けよ?)

(りょーかい!!)

中身は分かつてること、小さい方がレアなもの入つてそうだしね。
マ○オのピノ○オの部屋では小さい方選んだ方がたくさん アイ
テムが出てくる確率が高い。キノコ一個だけの時もあるけど。
いざ、オープン!

中に入つていたのは・・・紙?

2枚ある。なにこれ?

んーっと、『スキル取得券(人化)』

(おおおおおおおおおおお!!)

(破ればいいのかな?)

(びりびりにしてやんよ!!)

(テンション高くない?)

蜘蛛ちゃんが若干壊れてる。

券、ちぎつてみよ

『熟練度が一定に達しました。スキル『人化』を取得しました』

おお・・・マジだつたか

やつと人の姿になれる!やつたね!転生して魔物の姿に慣れてき
たけど、やつぱり人の姿が1番だよね!

(いやつふうううううううううう!!!)

いや、興奮しまくつてる人(?)見ると逆に冷静になるよね。うる
さいし蜘蛛ちゃんのチキン食べてやろうかな
(静かにしないとチキン食べちゃうよ?)

(むぐつ!)

はやつ:

(その前に人化してみようよ)

(うん!美味しいご飯が食べられるよ!)

((せーつっ!))

(セーのつ!)

スキル発動!!

ポンツて音とともに煙が上がつた。

成功したつぽい。

ちゃんと手足も2本ずつだね。

煙が晴れると、そこには前世で見た若葉さんの白いバージョンがい

九
七

「成功したれ」

「うん！ あ、二人はなーにかから喰れるのが！」

〔……〕
　蜘蛛ちゃん／平二ちゃん
　なんかやーちゃんくない?」

「う、子供の姿こぼつて、だか!?」
「ああ。まあ。

そし、子供の姿になっていたのである。

「なんで二枚…え！」

「サンタさあああああああん」

少し経つた後

「まあ、仕方ないよ。人の姿になれただけよしとしよう」

「うん」

「それに大丈夫！モコちゃんちつちやくて可愛いよ！」

「うるさいッ!!? どうせ私はちびなんだああ…前世でも背低かつたし

1

十一

やせいの

「「ふたばれええええええええ!」」

◆熟練度が一定に達しました。個

『熟練度が一定に達しました。個体、雷猫がLV.2からLV.3に

『各種基礎能力値が上昇しました』

『スキル熟練度レベルアップボーナスを取得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『蒼電魔法LV. 8』が『蒼電魔法LV. 9』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『雲魔法LV. 7』が『雲魔法LV. 8』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『予見LV. 1』が『予見LV. 2』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『瞬発LV. 5』が『瞬発LV. 6』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『MP超回復LV. 5』が『MP超回復LV. 6』になりました』

悲しみと怒りを鰻にぶつけたらスッキリした。
八つ当たりした。

ごめんよ鰻。

だが、鰻は嫌いだから容赦はしない。
ちようどここに現れるとは運のないやつめ。
んつ？なんかちょっと背が高くなってる気がする。
「蜘蛛ちゃん、これ経験値とかで背が高くなるみたい」

「ほんと!？」

「うん。さつきは壁の変な形の出っ張りに届かなかつたけど、今は届くし」

「やつたー！」

「そういうえば、私たち裸だよね」

「あ…」

蜘蛛ちゃんが糸でジーパンとフード付きのトレーナーを作つてくれた。

「ありがとう
「どういたしまして」

結構可愛い。気に入つた。蜘蛛ちゃんすごいや♪
「話変わるけど、モコちゃん……」

???

なんか嫌な予感。

なんで手前にしてジリジリ近づいてくるの!?
に、にげろっ！

「来るなッ！」

「断る!!」

ぬわああああああ!!!!?

「もふもふ！もつふもふ！猫耳と尻尾!!最高！いつもは雷バツチバチ
で触れないけど人になると雷なくなるんだね！もふもふもふもふ…」
「や、やめろおおお…」

もふもふしないで！どさくさに紛れて頭も撫でるなっ！
いつもなら抜け出せるはずなのに引き剥がせない…
なんで……

「なでなで♪」

「ふわああ

蜘蛛ちゃんが撫でるのこんなにうまいなんて……
聞いて……ない……よ…

…ハツ！

耳！尻尾！…ちゃんとある。

よかつたああ…

「おはよ」

「ひえっ」

咄嗟に尻尾を隠す。耳もフードで隠す。
フード付きでよかつた。

「ごめんって。もうしないよ」

「ほんと？」

「……うん」

「ほんと？」

「するかも」

……やつぱり。あんなに触る人は絶対またやるつて知ってるもん。

「ごめん。嫌ならもうしないよ」

そう言いながらものすごく残念そうな蜘蛛ちゃん。
別に…

「…に、……ない」

「え？」

「…別に、嫌じや…ない」

「え？ それって…」

「たまにしかダメだからッ!!

「やつた！ ありがとう!!」

「飛びついてくるなッ!! 今日はもうダメだつて!!」

バツー！ もふもふ！

「話を聞けえええええ！」

しばらくお待ちください

「はあ…はあ…はあ…」

なんとか逃げ出せた。

「逃げられちゃつた」

「しばらく触るの禁止!!」

「そんなん…最高の触り心地なのに…」

「ダメなものはダメ!!」

「ちえー」

蜘蛛ちゃんと触られすぎるとちょっと大変なことになつてしまふ。
猫になりそう。

魔物になつたけど、せめて意識だけは人のままでいたい。
こんなことで猫になるなんてやだ。

「そんなことよりも！鏡とかないんだからどんな感じなのか教えてよ」

「うん！あ、先に私のこと教えてよ」

「いいよ。一言で言うと白い。目は赤い。で、目の中に目が四つある。」

「え、なにそれ気持ち悪っ！」

「目を瞑れば人間に紛れても変じやないよ」

「透視すればいいのか！」

「私は？紛れられる？」

「耳隠せばいけるんじゃね？」

「尻尾は？」

「飾りつてことに」

「いける…か？」

「見た目は、髪は白くて、碧眼。綺麗だよ。空の色みたい」

「へえ～」

「んで、一番大事なのが耳と尻尾！」

「ふうん…ん？」

「丸いけどピンつて立つてる耳がかわいい！たまにピクピク動いてる！すつごいもふもふ！尻尾は細長くて、しなやか！ちよつとあつたかい！ゆらゆら動いててかわいい！すつごいもふもふ！」

「んなッ!?」

「あと、撫でるとすつごい気持ち良さそうにしてくれる！頭とか撫でるとニコつてして嬉しそう！他にも… バシッ…いだああ!?」

「何を喋ってんだよッ!!」

「照れてる」

「バシッ

「うるさいッ!!」

『忍耐』と悩み、そして縦穴

中層をぶらぶら散歩中。

魔物の姿の方が慣れてるから、今は人化してない。

最近はナマズ食べても鰻食べても人化して、結構ハイテンションだつた。いいこといつぱいあつたし。

でもこういう時に限つてなんか変なこと起こるよね。

なぜこんなことを言つてるかって？

実際に今変なことが起きてるからだよ!!..?

なんか、蜘蛛ちゃんが変。

虚空を見つめてぼーっとしてる。ん？ん？ちょっと悩んでるか？

ほんとに何してんだ蜘蛛ちゃん。

(うわ、あつたよ)

(なにが？幽霊でも見つけたの？)

(へ？なんで幽霊？それに見えないよ!!..?)

(だつてぼーっとしてたし)

(鑑定使つて取得できるスキル見てたんだよ!!..?)

(靈感があるわけじやなかつたのか…)

(ないつて!!..?壊れスキルだよッ!!..?あつたのはツ!!..?)

(へ？壊れスキル？怠惰的なヤツ？)

(そう。『忍耐』MPが続く限りどんなダメージでもHP1で生き残るんだつてさ。あとは…えーっと、Wのシステムを凌駕し、MA領域への干渉権を得るとかいう謎の文章)

(あ！それ『怠惰』の説明にもあつたヤツだ)

(どういう意味なんだろう…)

(さあ？わかんないよ。暗号とか？)

(うーん…)

(で、どるの？どらないの？)

(どる！今回は迷いませぬ。ポチツとな)

(あ、とるんだ)

（『傲慢』をとつてしまつた私にもはや撤退の二文字はない！この手のスキルは全部取る！さあ『禁忌』だろうがなんだろうがかかつてこいや！）

（お～見事なフラグ建築）

（ごめんなさい。やっぱ来ないほうが良かつたです）

（フラグにはまつた）

（『禁忌』が2つも上がつたよ…でもチート級の称号だつたよ。防御と抵抗が上がつたよ！）

（いいなー！支配者スキルは共有できないからな…）

（あと気になるのは邪眼系スキルの解放。欲しいわー。なんかの邪眼とか取つたら「くつ、右目が疼く！」とか、「これがモノを殺すということだ」とかいえるわけじやん？もうね、厨一心をくすぐるワードじやん。取りてー、けど、スキルポイントねー！あー、早くレベルアップしち）

（スキルポイント、共有してると取れるよ？）

（へあ？）

（私、スキルポイントたくさんあるし）

（マジで!?モコちゃん神か!?神なのか!?）

（はつはつはつ！）

（よし、とろう！でも、うーん…）

（今度はどした？）

（どれを取ればいい？呪いもいいし、重もいいな…）

（好きにしたらいいじやん…）

（うーん…うーん…）

（もう放つておこうかな…）

（探索してよ…）

(よし、決めた!!)

(あ、やつと?)

(うん! 保留!!)

(へ?)

これだけ考えて保留…
はあ…もういいや。こ⁵いう時は考えるのをやめるに限る!!

およ?

えー、こちらエルロー大迷宮中層探検隊!
テキトーに歩いて…探索してたら、でつかい縦穴を見つけました!
私と蜘蛛ちゃんが下層に落ちた穴かと思われます!
もしかしたらこれ…登つていけば上層に戻れるんじやね!?

圧倒的強者と『気のせい』

前回のあらすじ

中層を探検してたら大きな縦穴を発見した。これを使えば上層に戻れるのでは!?

(ほえー)

(縦穴だあ…これって登つたら上層に戻れるかな?)

(ハツ!さては天才だな!モコちゃん!)

(ふつふつふ…)

(さあ、行こう!!)

(おー…ツツ!!)

その穴を使って上層に戻ろうとした、その時だつた。今まで感じたことがないほどの恐怖に襲われた。ここに現れるのは圧倒的強者。本能が警鐘を鳴らす。ここにいてはダメだ。殺される。でも、カラダが動かない。なんで?死にたくない!まだ死にたくないのに…

(モコちゃん!?速く!!)

糸でぐるぐる巻きなされて引っ張られる。恐怖に抗えずき固まつていた私を引き寄せてくれた。

(…ありがとう、蜘蛛ちゃん)

(どういたしまして!つて、そんなことより今は隠れて!!)

少しづつ縦穴を通つて降りてきたのは大きな大きな蜘蛛だつた。あの怪物の前には何も通じない。勝てる可能性なんか一欠片もない。

(ひえ…)

(……マザー)

え?

いま、マザーって言つた??マザーってお母さんつてことだよね??あ

れが?蜘蛛ちゃんの?お母さん?
うつつそだろ?!?

こちらをじつとみて何かを探して。ま、まままさか！私たちを探してるとか！

（モコちゃん！前に出過ぎ！あんなのに目をつけられたら死ぬ!!）

（待つて蜘蛛ちゃん！あれほんとにお母さんなの!?）

岩陰に急いで隠れながら聞く。でも、その答えは聞こえなかつた。

次の瞬間、世界が揺れた。轟音と閃光に包まれた。

マザー（私じゃなくて蜘蛛ちゃんのだけど）によつてさつきまでなかつたはずの穴ができ、そこにマグマが流れ込んで行つた。

マザーはそれを一瞥してゆっくりと下層に降りていつた。

衝撃すぎてしばらく動けなかつた。

『熟練度が一定に達しました。スキル『恐怖耐性LV. 1』が『恐怖耐性LV. 2』になりました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『無音LV. 1』が『無音LV.

2』になりました』

あれは無理だ。どうすることもできない。でも、死にたくない。あのとき半分諦めかけた自分が信じられない。

私はこの中層で私たちにかなう敵はいないつて思つていた。慢心してた。甘々だつた。

でも、そんなことない。私たちは限られた中層で上位にいるだけに過ぎない。上には上がいる。油断してたらやられる。私は死にたくない。だつたらもつともつと強くなるしかない。大丈夫。できる。だつて、生まれた瞬間から強いものなんていないのだから。

（お？モコちゃん！探知さんがカンストしたよ！）

（いや、蜘蛛ちゃん：今いいところの。ちょうど新たに決意したいい

雰囲気の時なの。壊さないで)

(おおう……めんご)

(で、カンストしたの？すごいじゃん!!)

(はつはつは！……あれ？進化ないの？それはあんまりじゃない？ほんとに何もないの？)

(何もないってさー)

(はあ。無い物ねだりしても仕方ないか)

『ザ、……ザー、…』

(え？／ん？)

なんか変な音がした。まるで壊れたテレビみたいな、そんな音。(あれ？何で私も聞こえたの？特にカンストもおねだりもしてないのに)

(私も聞こえたよ。共有してるからじゃない？ていうか、気のせいじゃないの？)

(そうだよね…)

ここでそんな音がするわけがない。気のせい。もやもやとした違和感を覚えながらも私はこの問題を『気のせい』にした。

「まずは一つ。準備が完了しました。あとは…」

真実の力ケラ

どうもどうもどうもー

雲子でございまーす

…なんか混ざつた。あれ？ 混ざつてないか。

いつも通り魔物を倒してたんだけど、変化があつたよ。蜘蛛ちゃんに。

やつと決めたんだってさ。取得する邪眼。ポイントはいっぱいあるからいくつか取つちゃえばいいのに。え？ 私のだし大量に使うのは悪い？ 別にいいのに。邪眼は夢があるから慎重に選びたいって？ うーん…なる…ほど？ まあ、いいか。

蜘蛛ちゃんは『呪いの邪眼』を取つたって。その効果は絶大。弱体化させてHP、MP、SPを少しずつ奪うんだってさ。

しかも見られただけでそうなるんだよ？
えつつつつぐ。敵じやなくてよかつた。

また別の日のこと、お互ひ離れてスキルのレベル上げをしていたー。

そしたら、蜘蛛ちゃんが壊れた。

(もこもこもこもつこちゃん!!)

(え？ 大丈夫？ 壊れた？)

(そりなんだよ！…つてちがーーう!! 聞いて!!)

どうやら違うらしい。よかつた。

(うん、さつきから聞いてるよ)

(鑑定様がカンストしたよ!!)

(えー、いいなあ。私は9になつたけどカンストはまだかなあ)

(あの苦楽を共にした鑑定様が！ついにカンストした！ けど、進化とか派生はなしかー。いや、いいんだけどね。鑑定様がカンストしただけでもすごいことなんだけどね。こう、叡智を司る者の的な進化を少し期待してはいたんだよねー。ないのかー。鑑定様ならあるいはつて思つてたけど、ないのかー。ショックだわー。…本当にはないの？)

うん、すぐ期待してたみたい。たしかに鑑定さんの躍進は凄まじい。期待しない方がおかしい。私も期待してたり。

『ザ、……ザ、……ザ、ザー、ザー、……』

また、壊れたテレビみたいな音。やっぱり、気のせいじゃなかつた。これは気のせいにしちゃダメな部類のやつだ。また私にも聞こえる。

『ザー、要請、ザー、……上位管理者権限かく、ザー、……え?』

『ザー、理者サリ……ザー、……却下、ザー』

なんかやばい。

全くわからないのに得体の知れない怖さがある。

『ザー、ピン!』

急に聞こえた。ピンッという音に思わず体が震えた。

『要請を上位管理者Dが受諾しました』

『スキル『叡智』を構築中です』

『構築が完了しました』

『条件を満たしました。スキル『叡智』を獲得しました』

『鑑定LV. 10』が『叡智』に統合されました』

『探知LV. 10』が『叡智』に統合されました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『禁忌LV. 7』が『禁忌LV. 8』になりました』

『条件を満たしました。称号『叡智の支配者』を獲得しました』

『称号『叡智の支配者』の効果により、スキル『魔導の極み』『星魔』を獲得しました』

『MP回復速度LV. 4』が『魔導の極み』に統合されました』

『MP消費緩和LV. 3』が『魔導の極み』に統合されました』

『魔量LV. 9』が『星魔』に統合されました』

『護法LV. 4』が『星魔』に統合されました』

は?

はあ?

はあああああ？

意味がわからない。

なにこれ？

まるで、監視されているみたいだ。

今までそういう世界だつて認識でスキルとか取つてきただけど、日本
だつたらスキルなんてもんは存在してない。

日本だつたらスキルがあることのほうが異常だし。

でも、そんな当たり前のこと、この世界はそういう世界、なんて
安直な考えで受け入れて良かつたのか？

この言葉を信じるなら、上位管理者Dは私たちを監視している。そ
して、蜘蛛ちゃんの要望に合わせてスキルを作つた。
つまりスキルは管理者に与えられたもの。

目的は？理由は？私たちに何をさせようとしている？

『ザ、…ザー…』

まだ何かくる。

『教室で……あつちの世界から…』

…なに？これは……記憶？

『…の身代わり……うまく誤魔化す……』

こんなのは知らない。だつて、私は…私は…

『転生し…ザザツ…おつと、うつかりしてしまった…』

だれ？あなたは誰？あなたなんか知らない。だつて、私は…ただの
高校生なんだよ？

(((そうです。あなたは高校生です。あなたは知らなくていいんです
よ)))

意味がわからない。

ところであなたは誰？目的は？

((だから、管理者Dです。邪神とも言われています。せつかくな
であなたにも餞別をあげましょ))

餞別なんていらない。お前みたいなやつからもらいたくない。

『スキル『三貴神』を構築中です』

『構築が完了しました』

『条件が満たされていま……ザー……条件を満たしました。スキル『三貴神』を獲得しました』

『熟練度が一定に達しました。スキル『禁忌LV. 2』が『禁忌LV. 3』になりました』

『条件を満たしました。称号『神の権能』を獲得しました』
『称号『神の権能』の効果により、スキル『調停』『感情操作』『忘却の邪眼』を獲得しました』

『称号『神の権能』の逆効果により記憶の消去を開始します。現在の記憶消去率は0. 5%です』

『記憶の消去を停止するには特殊クエストのクリアが必要です』
『特殊クエストの進行度は0です』

『スキル『神格領域拡張LV. 5』を取得しました』

意味がわからない。

今までだつたら使えそうなスキルだなって喜べた。
でも、喜べない。

記憶の消去つてなに?
こんなのいらない。

なんで?

本当にあなたは何がしたいの?

何も奪われたくない。

なのに守つても壊されて奪われる。

なんで?

なんで奪うの?

だれか説明してよツ!!!



◆ ◆ ◆

今日はいつも楽しませてくれるあなた達に、褒美です
片方は代償をつけましたけどね
でも、人は極限まで追い込まれた時にこそ限界を超えるんです
頑張つてくださいね？
全てを忘れるか、全てを思い出すのか
全てを思い出したときあなたはどう思うのでしょうか？
さあ、もつと私を楽しませてください

今後の目標と最悪の目覚め

こんなちは（？）、雲子です。

いやあ、こないだは取り乱しちやつたけど、そんなことしてる場合じゃなくね？ってなつて平常運転に戻つたよ。

どうすれば記憶の消去を止める”特殊クエスト”つてやつを進められるのかな：記憶の消去つていつてもまだ0・5%らしいし、特に消えてる感じはない。だから、とりあえず止める方法を探さなくつちや

そんなわけで…

（どうすればいいと思う？）

（いや、知らんがな）

バツサリ切り捨てられた。かなしい。

（真面目に考えてよお～）

（わからん！）

（えー…）

（わからぬのに悩んでても仕方ないよ。とりあえず迷宮から脱出しない？）

（おお…蜘蛛ちゃんがなんか良さげなこと言つてる…え、どしたん？）

（いや、ひどいなオイ！）

（ごめんごめん）

（仕方ない。特別に許してやろう！じゃあ、気を取り直して迷宮を出るぞー！えい、えい、おー！）

（おー！つてまずはこの灼熱地獄から出ないとねー）

（ハツ！そいいえばそうだつた。この地獄に慣れてしまうとは…慣れとは恐ろしいもの…）

うん。蜘蛛ちゃんはいつも通りだつたね。

まあ、その明るさに救われるんだけど

今思えば蜘蛛ちゃんがいなかつたら私生きていられなかつたかも。

今の私があるのは蜘蛛ちゃんのおかげつてことかな…

（蜘蛛ちゃん）

(んー?)

(いつもありがとう)

(へ?)

(これからもよろしくね!)

(きゅ、急にそんなこと言わないでよー!）、心の準備が…)

(ほら、早く行くよ!)

感謝を伝えるのは大事だからね♪

(そういうえば、前に探索した時に上層への道見つけたって言つてな
かつた?)

(あれ? そうだっけ?)

(そうだよ! どつち?)

え…どつちだっけ?

えーっと…えつと…え…あ、えつと…

あ、あれ?

(まさか…)

蜘蛛ちゃんがジト目で見てくる…

やめて! そんな目で見ないで!

(そ、そんなことないよ! 忘れてない! 忘れてないもん!)

(何も言つてないけど)

(確認してくる! 確認! 大事!)

逃げる!! 空を飛べるつて素晴らしいね!!
えーっと…どこだっけ…

ぐーるぐーる

ぐーるぐーる

ぐーるぐーる

ぐーるぐーる

あ、あつた!

なんで何周もしないと見つからないんだろう…
まさか、何回も見逃してるだけ？

いやいや、そんなわけ…そんな…わけ……。
もう知らない！

帰る！

頑張つて道を見つけて帰つてきたのに…
そこにいたのは熟睡している蜘蛛ちゃんだった。

（――）。○○zzz…

（なんで寝てるんだよッ!!!）

『蒼電魔法LV.7 落雷（魔力少なめ）』!!

（起きやがれッ!!）

（うぎやあああああああ!!!!）

見事に命中！

（なになに!?敵襲!?!）

蜘蛛ちゃんはガバツと跳ね起きた。

今更起きてそもそも遅いんだよ？

（やあ、いい朝だね!!）

ギギギ…と壊れたロボットのように振り返る蜘蛛ちゃん。

目が泳ぎまくってるよ？

（……あ…も、モコちゃん）

うんうん。

制裁が必要だね♪

（よく眠れたかな?）ニッコリ

（あ…えつと…これには事情がありまして…）

（問・答・無・用!!）

さあ、雷を浴びて目を覚ませ!!

魔法の実験の時間だよ！

はい、どうも雲子です。

現在、私は1人です。

今日も今日とて中層は暑いです。いや、熱いか。
どうしたら中層をマグマをなくせないかな？
よし、マグマ消滅作戦を実行する！

どうしたらいいんだろう…

…スキルでも確認してみるか。

『蒼電魔法』は攻撃系で、マグマ消滅作戦には使えない。
『雲魔法』は雲を元にした便利な魔法。

あつ LV. 8 冷氷気 っていうのがある。

でも、冷氣だからマグマなら勝てなさそう。

こう…ポ○モンみたいな「れいとうビーム」とはないのかな…
シーン

…ここで『スキル『れいとうビーム』を取得可能です。取得します
か？』みたいな声が聞こえないってことはないのかー

残念、無念、また来年。

…何言つてるんだろ

他に役に立ちそうなのは…

ん？『天候魔法』？

やっぱ…存在忘れてた。

迷宮内だと使わないだろって完全に放置してた：

ていうか、迷宮内で使つても全然良くない？

迷宮内で雨とか降らせて見てもいいかもしねない。

ハツ、そうすれば雲が蒸発しなくなるかもしねない！

これは大発見！

『天候魔法』

LV. 1 快晴

LV. 2 雨乞い

これだけなんだよなあ、使えるの。

マジでなんで今まで使つてなかつたんだよ…：

一度試しに使つた時はなんの変化も起きなかつた。

その原因はおそらく、迷宮の外で降る様子をイメージしたからだと思われる。

寝る時にマイホームの周りだけ大雨を降らせたりしたら、敵を妨害できたのでは？

さつそく：『天候魔法 L V・2 雨乞い』！

あめようふれふれゝあめゝてるてるゝ

天井付近に雲が発生して雨が降るイメージでゝ

そうすると、ポツ・ポツと豪雨とまでは行かないけど傘をささないとびしょ濡れになつてしまふレベルの雨が降つてきた。

マグマに生息する魚どもは、雨を嫌がつてマグマに引っ込んでいた。

おおー。効果あるゝ

マグマ大好き、火吹くの大好きな魚だから雨は嫌なのかな？

フツ、勝つたな。

この中層にもはや私たちに倒せない敵はいない！

しかし、マザーを除く。

あんなん倒せる負けないだろ！

あの時は見られただけなのに命の危機を感じたよ
二度と会いたくないでござる。まる。

とにかく、レベル上げのためにずっと雨降らせておこうかなあ
でも、魔力の消費が激しいな…：

ん？蜘蛛ちゃんはどこにいるのかつて？

ふつふつふ…それはだね…

居眠りしてたお仕置きとして、食料調達の任務を課しております。
いや、決して面倒臭いからではない。
決して違いますとも。

お仕置きですから。

そろそろ戻つてくると思つてたんだけど…
全然戻つてこないな

魔力が充分回復したらすぐに雨乞いを繰り返す。

暇だから色々試したんだけど、込める魔力の量によつて雨の強さと範囲を指定できるみたい。

魔法つて面白いね！

うく

あく

暇だく

まつたく、いつになつたら蜘蛛ちゃんは帰つてくるんだよ
そろそろ心配になつてきたし、探そうかな。

見渡す限り、雨とマグマしかない。

誰だよ、中層全体に雨を降らせたやつは！

あ、私じやん。

調子に乗つて降らせまくるんじやなかつた！

蜘蛛ちゃん！

どこ！？

『無限話』で話しかけても応答ないし、心配…

どうしよ…

上空であわあわしてると、少し離れた陸地のところに白い生き物が
見えた。

この中層で白い生き物つて…もしかして！

急いで近寄ると、とぼとぼと歩く蜘蛛ちゃんを無事発見。

（蜘蛛ちゃん!!大丈夫!!）

（…うん）

（全然戻つてこないし、話しかけても応答ないし、すつづく心配した
んだから…）

（…うん）

元気ないみたい。どうして？

いつもは明るい楽しい蜘蛛ちゃんがすぐ落ち込んでる。

(どうしたの? どつか怪我でもしたの? 元気ないけど…)

(…ごめん)

(んえ? なんで謝るの?)

(…ご飯取つてこれなかつた。なんか、急に雨が降り出して…)
えつつ

雨つて…

(そしたら魔物がみんなマグマに引っ込んじやつて…)

あ…

それ…

(ごめん、それ私のせいだ。気にしなくていいよ)

(え?)

(魔法の実験で雨降らせてたんだ。ごめんね)
(ううん。こつちこそ居眠りしててごめんね)

お互い謝つて仲直り。

仲良しが1番だね。

あと、やりすぎは良くない。

懐かしの上層 はやくねたい！

蜘蛛ちゃんと仲直りしたあと雨が止むのを待つて、食料を調達した。

二人で分け合った鰻はいつもの10倍美味しかったよ！

ふう～

お腹いっぱいだよお～

お腹いっぱいになつたら眠くなつてくるよね

分かるでしょ？

…え？ わかんないの？

わかつてよ

眠い…

…寝よ

(え!? 気づいたらいつのまにか寝てるんだけど!!?)

スウ～（起つきろおおおお!!）

うるさ…

だか、この程度でこの私を起こせると思うなよ。

ぐう… z z z

(いや、起きてええええ!?)

ふつ…あまいな、、わう…

んう～、少し寝た！

(や…やつと起きた…)

目を覚ますとなぜかすごく疲れてる蜘蛛ちゃんがいる。

なぜに？

(どうしたの？なんで疲れてるの？)

(そんなの決まつて

(どうしたの？魔物に追い回されたの？)

(いや、だから

…ハツ！わかつたぞ!!

(火龍の集団に襲われたんでしょ！)

(そんなわけあるか!!なんで嬉しそうなの!!?)

(えー、じゃあなんのさ)

(モコちゃんが全然起きないからに決まつてんじやん!!)

(私何もしてないよ?)

うーん

蜘蛛ちゃんが意味わかんない。

ご飯食ってる時は幸せそうだったのに、起きたら疲れてたから推理
したのに何故か犯人扱いされてる。

寝てただけなのになんで蜘蛛ちゃんが疲れるの？
チラツ

蜘蛛ちゃんを見るとぐつたりして疲れてる。

うーん：

えいっ『雲魔法 LV. 7 癒し雲』

(どうどう？元気になつた？ねえどう？)

(うん。。なつたなつた。へーきへーき。ありがと)

おおー！よかつたあ

(ところで、上層への道はどこ？)

ああ、なんだあ。そんなこと？

(あつち)

(ほんと!? やつとマイホームに帰れる!!?)

大喜びの蜘蛛ちゃん。

見えてると逆に冷静になつてくるね。

上層に着いた。

意外と長くかかつちやつたなあ…
でも、あれは決めなくちや…！

踊り狂つてる蜘蛛ちゃんに突撃！

スウ～

(蜘蛛ちゃん、踊つてるところ悪いけど、マイホームは中層の近くにし
ようよ!!)

上層のマズイ魔物は食べたくない！

食べ物は死活問題！

マズイものはもう嫌だ！

人はもう美味しいものを知つたら元には戻れないのだ！

情報社会から狩猟社会に戻れつて言われても無理でしょ？
(うむ、いい案だねワトソンくん。そしてその通りだ！)

(あれ？ 口に出てた？)

(いや、これ念話だよ？)

(あ、そうだった)

それじゃあ、役割分担だ！

(蜘蛛ちゃんはマイホームづくりをお願い！)

(まかせんしやい！)

(私は周りの環境を整えるから！)

なんと！

マグマ地帯に雨を降らせまくつて、スキルレベルが上がつたのだ！

その名もく

『天候魔法 L V . 3 雪』

雪降らせたら当然寒くなるよね？

つまり力エルも蛇も蜘蛛も寒いと弱つて巣に来なくなる！
でも、そしたら私たちが餓死してしまいます。

それはいけません。

そこで！

魔物を誘い出す場所だけ、そこの気候を『快晴』にします！

そうすると、そこに集まつてきます！

名付けて、『魔物ほいほい』!!

でも、このままだと私たちも寒くなってしまいます。

だから、ホームの中も暖めます！

これで最高のマイホームの完成!!

これにて、マイホーム製作講座を終了！

暖かい家で私は寝る！

命の価値とは

おはようございます！どうも！

上層に帰ってきて数日。

私は、マイホームが最高すぎることに気づいた雲子です。
マイホームがあつていつでもグーすか寝れる。

うん。最高。

中層は蜘蛛ちゃんがいて何かと楽しかったから大丈夫だつたけど、一人だつたら「寝れない」、「楽しくない」「暑い」という嫌いなものトツプスリーが集まつたあの環境に耐えられなかつたと思う。いや、「暑い」じゃなくて「熱い」：かな。

それにもしても、私の眠りを邪魔しない上層の奴らは見所があるな。
お礼に勝負だ！

負けた方は食べられるから頑張れ！

なお、そのルールで勝つた奴はいない模様。
まあ、当然だよね。

もし負けたら私のプライドが傷つく。

あのマグマ地獄で頑張つたのは無駄だつたのかつてなる。

諦めずに頑張ればなんでもできるようになるつて前世では言われてたけど、前世では全く共感できなかつた。

でも、今ならわかる。

だつてこの世界は、戦つた分だけ、命をかけた分だけ、生きようと足搔いた分だけ強くなれる。それが実感できて、やる気にもなる。
まあ、今は「やらなければ死ぬ」から強くなりたいと思つてはいる。なろうとしている。

だけど、数値だけのステータスが全てじゃない。

私はそれを下層で嫌と言つた。

「死んだら終わり」

それは当たり前だつた。

当然だろう。死んだら、何もかも終わりなのだから。

そんな当たり前を覆す奴らが下層にはいた。

アノグラツチとバグラグラツチ。猿だ。

あいつらは仲間の復讐のために自分の命を簡単に捨てる。

「個」としての勝利には微塵も興味がない。

「群」としての勝利を掴めればそれでいいんだ。

そのためにはなんだつて投げ出せる。たとえ、それが命だつたとしても。

もう種族として狂つてゐるあいつらを見て、私は胸が痛くなつた。私は生きるために、強くなるために、誰にも負けないために命を奪つてゐる。目的がない殺しはしたくない。それが私の思い。死んでもいい生き物なんてどこにもいないから。

だから、何よりも重い命を軽く投げ出し、必要な勝利にさえも向かつて突き進む猿たちは、なんだか痛々しくて、そう言う種族として生まれてきてしまつたことが哀れに見えた。

「群」の邪魔になるとしても、命を賭けて死力を尽くせば勝てるかもしれないじやないか。

生き物は死力を尽くした時にこそ1番成長する。

あの猿たちの特性はその機会を投げ立ててでも「群」を大切にすると言うもの。

生まれながらにして種族としての特性で命の価値を決められているなんて…。なんて、悲しい生き物なんだろう。

理解が出来ない。私にはどうにも出来ない。

あれが種族として正しい姿だと定めた神様は残酷だ。

生き物は命があつてこそなのに。

だから、中層でナマズが「逃げる」という選択肢をとつた時には少し安心した。全ての生き物が猿のように特攻兵みたいじやないことがわかつた。だけど、だからこそ猿の異質さが浮き出てくる。

上層に戻つて、平和で墮落した日々を過ごせるようになつたはずなのに、猿のことが、命とは何か、そればかりが頭をよぎる。横を見ると畠にかかつた魔物を食べて満腹になり、寝ている蜘蛛ちゃんがいる。幸せそうな顔で寝ているなあ。

生き物として当たり前の「生きたい」っていう思いと「楽したい」つ

ていう思いを持ち合わせて自由に生きている。

本当に、蜘蛛ちゃんがいてくれてよかつたよ。

：みんながみんな、蜘蛛ちゃんみたいだつたらよかつたのに。

そこまで考えて口から深いため息が出た。

こんなに考え込むなんて私らしくないなあ：

そんなことを考えていた次の日。

感知でマイホームに向かってくる大勢の敵を見つけた。

そうしてやつてきた蜘蛛の大群からは“上位の存在に支配されていれる”ことが見てとれた。何故かは自分でも分からぬ。でも、思つたんだ。

ああ、『また命を投げ出す奴らが来た』つて。

守りたいもの

たくさんの魔物たちが襲撃を仕掛けってきた。今は奥まで攻めてくるわずかな時間で作戦を考えてる途中。

この世界は命を大切にしないやつばかりで困っちゃう。
意味わかんない。はあ：

まあ、マイホームまでは守れる自信がないけど、蜘蛛ちゃんは守れる！だつて、数日の間特訓して覚えた『雲魔法 L.V. 8 守護雲』で守れるもんね。蜘蛛ちゃんさえ守れればマイホームはまた作り直せる。だから蜘蛛ちゃんさえ守ればいい。もういつそのこと私が全部倒したほうがいいのでは…？

その方が蜘蛛ちゃんは怪我しないし。安心。うんうん。それがいや。

今だつてちやーんと蜘蛛ちゃんは魔法で守られて…つてええええええ!!?!!?

蜘蛛ちゃんにかけてた魔法が解けてるうううう!!?

うつそ??なんで？

ある程度の攻撃は防げるはずなのに!!?
勝手に解けるはずないのに!!?

(蜘蛛ちゃん!!?)

(うえつ!!?なになに!!?)

びっくりしてるところ悪いけどそれどころじゃないんだよ!!?

(上層に来てからなんか強い攻撃受けたりした!!?)

(え、いや?)

つまり、物理的じやないってこと?なら残るは精神攻撃。

精神攻撃。実は私、精神攻撃は結構得意らしい。

邪神Dから(強制)プレゼントされたスキル『三貴神』はとても相性がいい。このスキルは精神攻撃が主になつていて。

精神つていうか、内面？

まあ、それだけは感謝しておこう。

……それでも、私の得意分野で挑んでくるなんていい度胸じゃ

ないか。

蜘蛛ちゃんと魔物が来てる方向に『雲魔法 LV. 8 守護雲』を展開する。

(モコちゃん、なんか魔物がこっちに向かつてきてない?)

(うん、そうだよ。ということで全部私に任せてくれないかな?)

(いや、どゆこと? ていうか、なんで怒つてんの?)

(いやだなあ、怒つてなんかないよ。蜘蛛ちゃんに精神攻撃を仕掛けっていたヤツをぶつ倒したいけど、いないから今来てるヤツらに八つ当たりしたいとかでは決してないよ)

(思いつきり言つてる!!?)

ハツ。しまつた。思いつきり言つてしまつた。まあ、仕方ないね。

(…ん? いや待つて!!? 精神攻撃つて何!!? そんなの受けてたの!!?)

(うん。思考が変になつたりしてなかつた?)

(たまに、急に龍を倒さなきやつて思うことがあつたけど…)

(うん。それだね)

蜘蛛ちゃんが衝撃を受けて凹んじやつた。

マジか…つて呟きながら頑張つて現実逃避しようとしてる。

うん。それは今更無理だよ。

きつと今の私の顔はすごくいい笑顔で「諦めなさい?」つて訴えてるんだろうな。前世で友人に向けた時には「その顔を私に向けるな! 全てを投げ出しそうになる!」つて言われたからな…

あつ、今は魔物の姿だから平氣かも!

…うーん。でも、友人には「あなたの笑顔はいつになつても変わらなそうだわ」つて言われだし、変わつてないのがも…?

…ハツ! 今はこんなこと考えてる暇ないじゃん!

私のバカバカバカ…!!?

(ほら、早く立ち直つて!)

(うん…今更考えても意味ないしね!)

とりあえず、蜘蛛ちゃんは安全なところで観戦しててもらおうかな。

『雲魔法 Lv. 1 雲作成』

この魔法ほんとに便利！

(今日は私がやるよ。はい、この雲に乗つて！今から蜘蛛ちゃんは孫悟空だよ！)

(モコモコ雲だ！ありがと！)

雲の上でポフポフと跳ねて奇声をあげている蜘蛛ちゃんに背を向けた私は、魔物が来ている方向を見つめながら意識を切り替える。『蒼電魔法』の魔法全てを発動させ、少しづつ魔力を注いでいく。これからやるのは、魔物たちの呪縛からの解放だ。

操られている魔物の支配は、私にはどうすることもできない。だから殺すしかない。

そして、悪いけど私には守りたいものがある。
だから不届き者に容赦はしない。

ここにきたことを後悔しろ。

さあ、私たちの糧となれ。

禁術

戦闘準備、開始。

全てのスキルを常時発動^{パツシブ}に変更。

侵入者たちには私たちのマイホームに入ってきた記念として、プレゼントをあげなくちゃね。

いつも通り『蒼電魔法』を使おうと思っていたけど、なんか違う気がする。

それなら、管理者Dから貰つたよく分からぬスキルを試したみるいい機会だ。

鑑定をかけても効果がよく分からない。

なんか、意志と感情と記憶を操れるらしい。

よく分からぬけど、試してみれば分かるでしょ。

でも、これだけは直感で分かる。

モンスターに感情と思考があるかは知らないけど生物である以上最高のプレゼントになるだろうさ。

スキル発動。

さあ、自らの心象に苦しめられるがいい。

『忘却の彼方 ～想起 トトラウマ～』

相手の幸せの記憶とトラウマを暴き出し、それを再現する。幸せを見せてからトラウマを見せることで希望から絶望へと落とされる。心の奥底から沸きあがる恐怖と絶望によつて心は壊れ、“精神の死”となる。

精神が死ねば、身体が無事でも再び動き出すことはない。
精神と身体。そのどちらが欠けても生きていくことは出来ない。
どんな生物にも効き、どんな生物にとつても天敵となる。
でも、こんな能力にはもちろん代償が伴う。
いつの世でも強力な禁術は死と隣合わせのものだから。

(つつ…!)

自己ではない存在の記憶が、感情が流れ込んでくる。

たくさんの卵、そこから生まれてくる大量の蜘蛛。そして馬鹿でかい蜘蛛。

ただひたすらに戦い、強くなつていく。全ては死なないために。命令に従うために。

これは…誰の記憶だろうか…?

整理しようとしても記憶は洪水のように無理やり入り込んでくる。分からぬ。ごちやごちやに混ざりすぎて気持ち悪い。

次に入り込んでくるのは、感情の嵐。

そして、蜘蛛たちが死ぬ間際に想うこと。大きな悪意となつて襲いかかってくる。

苦悩、困惑、悲嘆、寂寥、恐怖。希望とそれを塗りつぶす絶望。元凶である私への強い恨み。

初めて向けられる、大きくて深い深い悪意。自分の存在までもが否定されるほど。

私は生きていてもいいのか、あつてもいい存在なのか、どんどん分からなくなつっていく。

マイホームを攻めてきた侵入者は反省させて、倒すべきだ。

その思いはいつでも変わらない。

でも、私は重要な判断を間違えてしまつたのかもしれない。

誰もが惡意を抱えて生きている。それをここまで引き出し、全てが私に向けられている。

いつもの狩りとは違い、相手の心を弄ぶ殺し方。

正しいと思つてやつたことが、本当に正しいのか分からなくなる。

”正しい”つてなに?
なにをするのが正解だった?

整理できない感情に頭が真っ白になる。

目の前に広がるのは、もがき苦しんだ末にピタリと動かなくなつた

蜘蛛たち。

軽い気持ちで使つてスキルはとんでもない禁術だった。
激しい頭痛に襲われてながら、私は思った。
—ああ、こんな能力、最悪だ。

相手を『想う』ゆえに

目が覚める。天井が見える。隣には蜘蛛ちゃん。目を閉じる。

あー、何もやる気が起きない
うん、わかってるよ？

このままじやダメ人間になるつて。あ、人間じやなくて雲だつた。
わかつてゐわかつてゐる。
ちよつとほつといでよ

氣力が出ないんだよ。あるでしょ？こういうこと
あの能力を使つてから、頭がこんがらがり過ぎてて無理。
改めてあの時の状況を考えてみる。

まず、蜘蛛ちゃんとひつそり攻撃してた陰湿なやつの配下攻めてきた。

だからぶちのめした。

ただそれだけのこと。今まで通りで当たり前。でも一つだけ違う
ことがあつた。

私はDに貰つた、いや、無理矢理与えられた能力を使つた。
使つてしまつた。

あんな能力は嫌いだ。

でも、あれが1番楽でいい選択だつたと思つてゐる自分がいる。
なぜあの能力を手段として選んでしまつたのか、最初はいつも通り
『蒼電魔法』を使おうと思つていたのに。

本当なら、今もいつもみたいに蜘蛛ちゃんとバカ騒ぎして、過ごして
いるはずだつた。

好奇心に負けたんだ。

どうせ、こうなることもD^{アイツ}にはお見通しだつたんだ。

だからこのスキルを渡してきたんだって分かる。

分かればわかるほど、見透かされているような気がして腹が立つ。
すべてDの掌の上で転がされているみたい。

どうして実際に会つてもいない相手にこんな感情を抱くのか、わからぬ。

もう全部わからない。

それに、あの時は混乱して聞き流してたけど、確かに聞こえたんだ。
『特定の能力の使用を確認しました。記憶の消去が進行しました。それ
に伴い、特殊クエストが進行します。』

つて。

ハハ、意味がわからないよね。

記憶の消去を止めるためのクエストだよ？

なのに、消去が進むスキル、Dが渡してきたスキルを使うとクエス
トが進む。

記憶の消去は止めたい。だからクエストを進めるべきなんだ。
そう思っていたはずなのに……

スキルを使うとクエストが進む。でも記憶の消去も進む。

雲間

空

モコ
私が消えていく。

モコ
私が消えていく。

人生

私の記憶が消えていく。

私が私でなくなつていく。

それが何よりも恐ろしい。

蜘蛛ちゃんには心配をかけたくない。

危なつかしいから私が守つてあげなくちゃ。

私は今まで通りに蜘蛛ちゃんと楽しく過ごしたいだけ。

唯一無二の『親友』と。

◇◇◇

蜘蛛ちゃん side

この間、手下の蜘蛛たちを追い払ってくれてからモコちゃんが落ち込んでいる？件。

なんだか塞ぎ込んじゃって、どうすればいいかわからん。ここで前世でコミュ障だつた影響がガガガガ…

とりあえず食料確保のためにマイホームから出た。もちろん寝てるモコちゃんを起こさないようにね。

うーん……あ、力エルみつけ。

ぐーるぐる、ガブツ

素早く糸でぐるぐる巻きにして毒牙でガブツとトドメを刺す。

最近こいつらめっちゃ逃げるから食糧の確保が大変だつたんだよね。

今日はラツキー！

：モコちゃん。力エル食べたら元気になるかな：

いやいや、そんな単純じやないか。それに食べるならウナギとかの方が喜ぶよね。

出会った時からもこちやんの方がずつとずつと強くて、すごいからついつい頼っちゃつてた。

今思えば、私モコちゃんに頼られたことあったつけ…？

1人で頑張つて、1人でいっぱい溜め込んで、溜め込みすぎて壊れる。モコちゃんはそんな子。

だから、このままじやきっと

モコちゃんが壊れちゃう

だから、
もつと、頼つてほしい。
もつと、寄り添わせてほしい。
今まで一緒に生き抜いてきた。
前世と今世合わせて初めてできた、『親友』なんだから。

想いを胸に仕舞い込んだまま、私は迷宮を進んでいった。

たたかい

蜘蛛 spider

大物はどこじやーい！さつさと出てきやがれ、おらー！
ごほん、失礼。取り乱しましたわ。今から作戦を決行いたします
わ。

その名も：『大物を取つてきて、モコちゃんを元氣にする作戦ー』!!
え、名前がそんまんま？いいんだよそんなことは。
そんなに甘くないって？そんなん知るか！私は私にできることを
するだけじやい！

よし、盛り上がつていくぜー！！

ということで盛り上がり上がつて…じやなくて大物を探すよ。
私がいる上層の中で大物といえば蛇かな。不味いけど。
上層で頂点に立つっていた蛇。めつちや苦くて不味いけど。
だが、今の私の敵ではない！

と一人でくつちやべつていたその蛇をはつけーん！

さあ今こそ下克上！今から上層の覇者はこの私よ！

内心馬鹿騒ぎしながらも実際は音もなく近づく。

そして中層でも大活躍の我が鎌！主に活躍したのは鱗剥ぎだけど
！これを、振ります！

そうすると、あら不思議。あつという間に輪切りに
ふ…またつまらないものを切つてしまつた：
決まつた…！

もつと多いほうがいいかもだけど、モコちゃんが心配だし帰るか。
そろそろ調理して食べたい…！今は魔物を生で食べるという人間
からはかけ離れた生活をしてきたけど、元人間だからね。
調理といえば、まず焼くことからだよね。火…火…。火なあ…。火
魔法、存在自体はしてるけど取れないんだよなあ…。

私は蜘蛛で、モコちゃんは雲。両方とも火との相性は最悪。相性が
悪ければ悪いほど、取得は難しくなるしスキルの成長も遅くなる。

だから、わざわざ大量のスキルポイントを使って火魔法を取得するよりも他のスキルを取つた方がよっぽど効率がいい。

でも悩むなあ…クソ不味い魔物の肉も焼けば美味しいくなるかもしない。

でも……っ!?

周りから視線を感じる。あきらかに敵視されている。殺るしかないか。

敵の質は低い。でも、数えきれないほどの気配を感じる。
敵は蛇、カエル、蜥蜴、三匹セットの恐竜…上層の魔物が集まっている。

何が目的だ?

考えられるものは復讐。でも、この世は弱肉強食。負けたほうが悪い。弱い奴が悪い。

強くて危険なやつに対抗するには?

答え：数で対抗する

本能から、私という危険生物を倒そうとしているのだろう。
モコちゃんと一緒に行動の今の方が勝てる確率は高くなる。

だけど、負けるわけには行かないんだよっ!

本能 vs 理性の戦いが始まった。

side out

雲 side
なに!? 急に大量の気配が現れたんだけど…
びっくりし過ぎて目が覚めたよ。

一つの場所に殺到してゐるみたい。なんで？
あれ：蜘蛛ちゃんいない。

じゃあ、まさか！？

無駄にある想像力で想像してしまつた未来に冷や汗が出る。
嫌な予感が的中しないことを願いながら私はマイホームを飛び出
した。

s i d e o u t